

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期過程
言語応用専攻日本語教育学専修コース

5110001

榎本るい

<訪問先の情報>

1. 訪問に関する一般情報

訪問地（国・都市）

ルーマニア・ブカレスト

訪問校・訪問先

ブカレスト大学

訪問先を選んだ動機

日本語教育が盛んなことで知られていない国の日本語教育とは、どのようなものか興味があったため。

訪問期間

2011年3月9日～3月23日

住居・宿泊先

Golden Tulip

2. 訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

ブカレスト大学 外国語外国文学部東洋言語学科日本語専攻（日本語学科）

規模（学生数など）

日本語学科学生数 221名

立地（周辺の様子）

ブカレスト市内の中心部にあり。バス・地下鉄など交通は発達していて便利である。キャンパスの周辺には、飲食店や本屋など多くの店が並ぶ。

学部構成

管理学・商学部、神学部、生物学部、化学部、外国語学部、地理学部、地質学・地球物理学部、歴史学部、新聞学部、法学部、文学部、数学・コンピューターサイエンス学部、哲学部、物理学部、政治学部、社会学部、心理学・教育学部

学事暦（授業期間／休暇期間）

学部によって多少異なるが、大体以下の通りである。

前期：10～2月（12月20日～1月5日は冬期休暇）

後期：3～6月（5～6月の間に4週間ほどの試験期間、7～9月に夏期休暇）

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

教育機関としての特徴・位置づけ

ブカレスト大学の日本語学科はルーマニアで一番伝統が長く、大きい学科である。2005年にはルーマニアで初めての日本研究中心の修士課程も設立した。また2005年にはブカレスト大学の日本語教師の積極的な努力により、初めてルーマニア日本語教師会が設立された。ヨーロッパとルーマニアの日本語教育の中でのブカレスト大学日本語学科の役割は国際交流基金のさくらネットワーク中核メンバーに選ばれたことでも証明されている。2010年にヨーロッパ日本語教師会とルーマニア日本語教師会の共催で「第15回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム」がブカレスト大学で行われた。

また同年、初めて日本の大学の日本語教育専攻の院生を実習プログラムで受け入れるようになった。

1990年以来、日本語学科は国際交流に次第に力を入れ、日本とヨーロッパの大学と交流協定を結び、非常に良い協力関係を築いている。その結果、2010年にブカレスト大学日本研究センターが設立されることとなった。

日本語講座の特色

専任教員が若く、お互いに協力しやすいと、外部からも纏まったチームとして認められている。特に初級レベルの授業でルーマニア人教師と日本人教師が同じ教科書を使用し、非常に効果的な協力ができている。教員は教材開発や新しい教授法に関心を持ち、ルーマニア語を母語とする学習者向けの教材も作成した。

学習者の特色

学部及び修士課程に応募する者が増えつつあり、その動機、ニーズ、期待なども非常に多様化している。

日本語・日本文化に非常に強い興味を持っている学生の数が増えてきている。また、ボランティア活動（例えば子供に日本語・折り紙・書道などを教える）に興味を持っている学生の数も増えている。

日本語教育開始年月日

主専攻：1987年から

副専攻：1975年から

国際交流基金の派遣：1978年から

日本語学習者数

221名

一クラスの学生数

1年生 64名、2年生 57名、3年生 50名、大学院生（修士課程）: 30名、他の学部所属の学習者（選択科目）: 20名

1～3年生は2クラスに分かれるので、1クラス 30名前後となる。

主な開講科目について（科目名・学年・時間数等）

1コマ 120分

講座の種類	対象者	1週間当たりのコマ数	開講期間
演習	1年生（初心者）	4コマ	前期・後期
演習	1年生（経験者）	2コマ	前期・後期
演習	2年生	4コマ	前期・後期
演習	3年生	3コマ	前期・後期
演習	院生（修士課程—初心者）	1コマ	前期・後期
演習	院生（修士課程—経験者）	1コマ	前期・後期
演習（選択科目）	他の学部1年生	1コマ	前期・後期
日本語学	1年生	1コマ	前期・後期
日本語学	2年生	1コマ	前期・後期
日本語学	3年生	1.5コマ	前期・後期
ビジネス日本語 （選択科目）	3年生	1コマ	前期・後期
現代日本語事情	院生（修士課程）	1コマ	前期・後期

日本語担当教員数

専任（日本人： 2名、日本人以外：国籍 ルーマニア 5名）

非常勤（日本人： 0名、日本人以外：国籍 ルーマニア 1名）

使用教材

主教材：『日本語初歩』、『中級へ行こう』、『中級を遊ぼう』、『げんき』、『新日本語の基礎』、
『新日本語あ・い・う・え・お』、『日本語敬語トレーニング』、『ビジネス日本語①内定者編』、『ビジネス日本語②新入社員編』

副教材：『絵で導入・絵で練習』、『日本語で歌おう』、『絵入り日本語作文入門』、
『エリンが挑戦！日本語できます』、
『ロールプレイで学ぶ日本語会話—ブルガリアとルーマニアで話そう』、
『なめらか日本語会話』、『テーマ別中級から学ぶ日本語』、『日本語敬語トレーニング』、

『ロールプレイで学ぶ日本語会話—ブルガリアとルーマニアで話そう』
適宜、新聞などの生教材、自作プリントを使用。

クラスの様子

ルーマニア人の教師の授業では媒介語（ルーマニア語）が用いられることが多い。日本人教師の授業はほとんど日本語であり、理解が難しいところは英語での説明が入ることもある。学年が上がるにつれて日本語能力も上がるが、経験者がいることや、積極的に発言する性格かどうかということなどが関係して、3年生よりもよく話す1年生というのは珍しくなかった。

学生は授業中ノートを取り、疑問点は教師に質問するなど意欲的であった。

付属言語教育機関について（訪問国の言語を教えるコースの有無・授業料・授業編成等）
該当なし。

臨地実習に行くのが望ましい時期

日本の大学の夏休みの時期は、ルーマニアも夏休みで授業がないため、春休みに行くのがよいだろう。授業は2月中旬から始まるが、シンポジウムやフェアなどがあるため、まず実習先に忙しい時期を聞いた方がよい。

3. 宿泊先について

住居の形態

Golden Tulip というホテル

シャワールーム、トイレ、タオル、シャンプー、ドライヤー、冷蔵庫、電気ポット、テレビ、クローゼット、机などがある。毎日、清掃を希望することも可能。朝食付き。PC を持っていけば LAN につなげて使用できる。ラウンジでも無線 LAN で利用できる。

1泊約 90€

学校までの行き方

徒歩 15分

周辺の環境

大学までの道は大通りを通るので覚え易い。ホテル周辺のレストランは高いので、大学近くのスーパーで買い物するとよい。ホテルは大きな通りに面しているので、夜でも明るい。

4. その他、補足事項

ホテルの周辺にはスーパーはないので、大学から帰宅する途中で飲み物や夕食を買った方がよい。袋は有料なので、買い物の際には持っていくとよい。シャンプーとボディーソープが一緒な

ので、分けたい人、リンスも使いたい人は持って行くか買う必要がある。電気ポットがあるが水道水は飲めないため、ミネラルウォーターを買う。

2011年3月ではお金が lei という単位だが、今後€に変更予定のため、行く前に確認する必要がある。現地で円から lei に両替できないため、日本で€にして持って行く。逆も同様。

〈その他研究、実習の成果〉

1. 施設見学に関して

1. 1 内容

ブカレスト大学の日本語学科は、本校舎とは別棟のため小さく、日本語の授業のために常に使える教室は2つしかなかった。年々日本語学科を志望する学生が増えているということで、教室の机と椅子が足りないというのは普通である。また、教室の机が長机のため移動は難しく、グループでディスカッションをさせたりするには不向きである。現地の教師もグループワークがしづらいので避けてしまうと話していた。

PCがある教室では、実際にはプログラムが正常に働いていないため、PCはほとんど使用していない。教師の中にはPCのディスプレイで生徒の顔が見えないので邪魔であると言っている人もいた。学生もノートを取るためにキーボードが邪魔なので立てかけているという状況であった。この教室にはプロジェクターがあり、教師の机のPCの画面を映して、USBやパワーポイントを利用することができるので、後ろの方の学生にも見え、便利であった。また、ここでは毎週金曜日の授業後に、日本に関係あるバンドや映画などの上映会が学生によって行われている。

ブカレスト大学の図書館はとても大きなものが少し離れた場所にあるが、日本語学科の図書室が別に設けられている。それは2つある教室のうちの1つである。その教室の本棚には日本語の本が並べられていて、決まった曜日と時間に行けば借りることができる。しかし、狭い教室なので十分な数があるとは言えない。

書道の授業があるが、和紙はなかなか手に入らないため悪質な紙を代わりに使っている。筆は1人1本あるが硯は2人で1つを使う。

食堂はないが地下にサンドウィッチや飲み物が買えるカフェテリアがある。しかし、校内にはほとんど食べる場所がないので、学生は廊下で立って食べている。基本的に教室内は飲食禁止である。

日本語学科の教師部屋には、PC1台とコピー機が1台ある。プリンターは故障しているため使用できない。机が1つと椅子が数個しかないため、各教師の机はない。教師全員は座れないので、お茶を飲みながら立ち話をしていることが多い。教材に関しては、豊富にあるため教師の好みで色々なものを使用しているようだった。部屋は狭いが和気藹々と授業の話などをしていった。

1. 2 学んだこと

設備はあるが十分に利用できていないということがわかった。その理由は機械があるだけでシステムが十分に整備されていないこと、機械を使いこなせる技術を持った教師がいないこと、壊

れたものをすぐに修理できないことなどが挙げられる。与えられた環境で、利用できる最大限のことをするという事は難しいということ、この問題を常に意識しているが改善することができないと悩んでいる教師たちを目の当たりにして実感した。

また、教材が豊富にあるということは、日本ではない国では恵まれていることだと思った。豊富にある教材の中から学習者にあったもの、理解し易いと思われるものを副教材とまでいかなくとも提示することができる。そういったものを十分に活かすことが大切だと思った。

2. 授業見学に関して

2.1 内容

1～3年生、院生の授業を見学した。文法の授業では、教科書やプロジェクターなどが使われ教師が言ったことを学生が一生懸命メモしていた。学生からの質問も多くあり、教師は例文を多くあげるなどして説明していた。また、学生が間違ったときにはすぐには答えを言わず、ヒントを出して学生が答えられるようにしていた。

2年生の授業にプロジェクトワークがあり、グループになって日本語のアニメーションを作るというものがあつた。絵や動画を自分達で作る、セリフも自分達で吹き込むというものである。途中段階のものに教師がコメントしたり、スクリプトの日本語の訂正を日本人が手伝ったりして、学生達で完成させた。出来上がりは、どのグループもストーリーやイラストがかなり個性的でおもしろかつた。

3年生の文法の授業では、テンスやアスペクトなど、かなり難しい内容を勉強していた。文型は既に学習済みだが、その文型の指す範囲について考えるというものであり、授業内容は講義に近かつた。

院生の授業はビジネス日本語であつた。日本語学習用の教材を用いていたが、それだけではことばも難しく場面が想像できないだろうという教師の考えで、日本人向けのビジネスマナーのテキストに付いているDVDも一緒に見せていた。これは、学習してもまだ時候の挨拶など実生活で使用する機会がない学習者にとってはとてもいいと思った。

2.2 学んだこと

全てを通してルーマニア人の先生の授業では、媒介語（ルーマニア語）を用いることがほとんどであつた。教師はその方が時間短縮になると話していた。ただ見学しているだけの授業もあつたが、話し合いの作業などがあり、学生と話す機会がある授業もあつた。日本語で質問しても英語で返事をするという学生が少なからずいた。口慣らしのために会話を練習することはあるが、実際の会話をしてみるという授業がないことに気が付いた。これは日本人教師や卒業生も問題として捉えていた。勉強したときに頭に知識は入っているが、実際の会話で使う練習をしていないので、機械的な練習の時には言うことができても、自分の考えを伝えるときにことばが出てこないということだつた。

また、一見学生が楽しそうに取り組んでいたプロジェクトワークであるが、ある学生からあれ

は日本語の勉強でなく PC の使い方の授業になってしまっているという話を聞いた。セリフを日本語で考え、それを録音するが、実際にグループで作業するときには日本語は使っておらず、イラストを描くことや音声と併せることの方に時間がとてもかかるということだった。

これらのことから、学生達は授業に不満や、もっとこういうことを勉強したいなどの要望を抱いていることがわかった。教師に対して面と向かって言うことはできないが、何らかの形で学生達の意見を聞いて反映するというシステムが必要ではないかと感じた。

しかし、教師は学生のことをよく見ており、よく発言する生徒とまだ発言していない生徒などを把握し、それに合わせて授業を展開していた。授業の進度も学生の理解度によって変えられていた。学生をよく見るということが大切であるということが改めてわかった。

3. 教壇実習に関して

3. 1 内容

実施日：2011年3月18日

対象者：日本語初級クラス（1年生）

学習項目：～ておく

使用教材：特になし

教案

時間	学習項目	活動内容	教材
3分	復習「～ている」	T：S1さん、今、何をしていますか。 S1：勉強をしています。 ・・・ T：S2さん、S3さんは何を着ていますか。 S2：黒い服を着ています。 T：他には？ S2：めがねをかけています。 ・・・	
3分	復習「～ていた」	T：S4さん、昨日の昼は何をしていましたか。 S4：友達と遊んでいました。 T：S5さん、S4さんは昨日の昼、勉強していましたか。 S5：いいえ、勉強していませんでした。 T：何をしていましたか。 S5：友達と遊んでいました。 ・・・	
3分	導入「～ておく」 (準備)	T：明日はロマン先生の誕生日パーティーです。 どんな準備をしますか。	画像

		<p>画像を見せながら、答えさせる。</p> <p>S6：掃除をします。</p> <p>T：掃除をします。掃除をしておきます。</p> <p>S7：プレゼントを買います。</p> <p>T：プレゼントを買います。プレゼントを買っておきます。</p> <p>S8：手紙を書きます。</p> <p>T：手紙を書いておきます。</p> <p>S9：花を飾ります。</p> <p>T：花を飾っておきます。</p> <p>S10：料理を作ります。</p> <p>T：料理を作っておきます。</p> <p><板書> 掃除をします。 ～ておきます。 おく。</p>	
5分	練習「～ておく」 (準備)	<p>学生に答えさせる。</p> <p>T：パーティーの前にどんな準備をしますか。</p> <p>S11：料理を作っておきます。</p> <p>...</p> <p>T：試験の前に、どんなことをしておきますか。</p> <p>S12：単語の勉強をしておきます。</p> <p>...</p>	
15分	練習「～ておく」 (準備)	<p>ペアになって練習、その後発表させる。</p> <p>S11：S12さんは、試験の前にどんなことをしておきますか。</p> <p>S12：復習をしておきます。</p> <p>...</p>	
2分	導入「～ておく」 (放置)	<p>AさんとBさんを見せる。</p> <p>A：今日は暑いです。暑いですから、ドアを開けておいてください。</p> <p>Bさんは、開けた後、何もしません。</p> <p>A：お腹がいっぱいです。パンはしまっておいてください。</p> <p>Bさんは、しまった後、何もしません。</p> <p>A：その漫画はまだ読んでいません。そこに置いておいてください。</p>	AさんとBさんの絵カード

		Bさんは、置いた後、何もしません。	
5分	練習「～ておく」 (放置)	Tがキューを与える。 T: 暑いんです。ドアを開けてください。 S13: 暑いんですから、ドアを開けておいてください。 T: まだジュースが冷たくないです。冷蔵庫にしまってください。 S14: まだジュースが冷たくないんですから、冷蔵庫にしまっておいてください。 ...	
1分		T: これは日本のお菓子です。欲しい人は休み時間に食べてください。ここに置いておきます。 T: これは日本の雑誌です。読みたい人は後で読んでください。ここに置いておきます。	

3. 2 学んだこと

人数が多かったのが絵カードで提示するのは難しいだろうと考え、パワーポイントを使用したのが、単語や動詞の順番を変えて提示するときなど、使い勝手が悪いということがわかった。大きな声で授業を行うことを意識していたが、その点は問題なかったと思う。

学習者の既習語彙や漢字を把握していなかったため、学習者が戸惑う場面があった。しかし、他の先生から未習のものも理解させることができれば提示した方がいいと言われた。学習者が漢字に慣れることが期待されるとのことだった。

文型の練習をする問題を出したが、学習者がもっと身近に感じられる場面設定をするべきだった。ただの文型の練習になってはいけない。「～ておく」の文型を導入したが、時間の流れも一緒に提示した方がわかりやすかった。

同じ内容の授業を2回行ったが、2回目の方が学習者の様子を見て進行することができたと思う。学習者の様子を見て、単語の意味がわかっているか、発音練習が十分かなどを判断し、学習者に合わせた授業を作り上げて行くことが大切だと思った。

完璧な授業というのには程遠いが、前よりも良い授業を毎回目指したいと思う。

4. 今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

4. 1 臨地実習の派遣先として

先生方はお忙しく、日本から連絡を取ることが大変であったが、実習先では授業のことに限らず生活のことや学生との交流などについてもとても気を遣っていただいた。見学できる授業も多くあり、予定外の授業にも先生方の招待でゲストとして参加させていただいたりした。休み時間には先生方は模擬授業の相談に乗ってくださるなどとても協力的であった。学生も積極的に交流

を持とうと授業後の予定を立ててくれるので、授業外での交流も深めることができた。

実習日や授業内容は実習先に行ってから決まったが、希望を聞かれたので前もって希望を伝えればある程度考慮してもらえるかもしれない。文型もどの順番で教えるか決まっていなかったようなので、あまり突拍子もないものでなければ、希望のものを扱うことができる可能性がある。

日本語教育に力を入れているが、柔軟性の高い授業構成のため、実習生にとっては自由に授業をする機会が得られる場である。

4. 2 全般的に訪問先として

都会であるが治安が悪いという印象は受けなかった。アジア人というだけで話しかけられることはあったが、夜まで出かけた日には必ず学生がホテルまで送ってくれた。物価も安いので食費や交通費で生活が苦しいということはなかった。欲しいものはたいてい売っているので手に入れることができた。両替所も町中にあるので生活に不便を感じることはなかった。

ルーマニア人はほとんどの人が英語を話せるので、ルーマニア語ができなくても1人で買い物するときなどには問題ない。個人的に訪問先として適していると思う。

4. 3 本学学生の訪問先への貢献

ルーマニアには日本人が他のヨーロッパ諸国に比べて少ないので、まず日本人というだけで歓迎される。日本の文化に興味がある学生は、同年代の日本人と話せることが嬉しいという気持ちが伝わってくる。日本語を上手に話せるようになりたい、そのためには日本人と話して練習したいが日本人と知り合うことができない。日本とは時差が7時間もあるため、skypeなどでリアルタイムでやりとりできる日本人の知り合いを作ることは難しいのである。

学習面で本学学生が貢献できることは少ないかもしれないが、日本語を勉強するモチベーションを高めるといふ役割は果たしていると思う。実際、彼らと話していた2週間でみるみるうちに、スムーズに話せるようになっていった学生がたくさんいた。知識はあるが、それをアウトプットすることに慣れていない学生は一度そのやり方がわかれば、すぐに話すことが上達し、もっともっと話したいという気持ちになるようであった。

また、授業では扱わないが日頃、アニメやドラマで耳にしている疑問に思っていた日本語について、質問を多くぶつけられた。それぞれが止めどなくそのような質問をしてくるので、教師には聞きづらいが日本人に聞いてみたかったことがたくさんあったんだということに気付かされた。本学学生が持っている知識に関わらず、日本人に触れたいという学生の気持ちに応えられていることが1番大きいと思う。

4. 4 今後の課題・提案

ブカレスト大学の協定校である他大学の学生が、同時期に英語学習と文化交流という目的で滞在していた。彼らは日本語を教えることが目的ではないので、日本語の授業のときに日本語が通じなければ英語で説明をしていた。そのため、私が日本語でとても簡単な質問をしても英語で返

事をしてくる学生が少なからずいた。実習生と他大学の学生の区別はブカレスト大の生徒にはできていないのかもしれないが、日本語を聞き取れているのであれば、まずは日本語で返事をしようとしてほしいという思いがあった。日本語は積極的に話さないが、日本人との交流に関しては積極的なので、間違えることを恐れて英語で話してしまっているのだと思う。今回、そのことを指摘できずに、英語で返事をされても日本語で話しかけ続けるということしかできなかったが、話さなければ上手くならないということや間違えても恥ずかしくないということも伝えられればよかったと思う。

学生は毎年、日本語が話せる人が来ることを楽しみにしている。実習をする対象は1年生なので、必然的に一緒にいる時間も多くなるが、去年、模擬授業を受けた2年生が今回来る人とも関わりたいと連絡を取ってきた。私も去年行った人から学生の話を知っていたので、すぐに打ち解けることができた。多くの学生に機会をあたえるため、たくさんの人と知り合うために、このようなネットワークが些細なことのようにとても大切だと思う。来年もブカレスト大学に行く実習生がいれば、私のネットワークを是非引き継ぎたいと思う。

模擬授業の内容なども含めると多くの課題が残るが、今回経験したことは次へとつながっていくだろう。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期過程
言語応用専攻日本語教育学専修コース

5110012

小島めぐみ

<訪問先の情報>

1. 訪問に関する一般情報

訪問地（国・都市）

スペイン・マドリッド

訪問校・訪問先

マドリッド自治大学（Universidad Autónoma de Madrid）

訪問先を選んだ動機

マドリッド自治大学はスペインの大学で唯一東アジア研究科がある大学であり、日本語の言語科目が開講され、志ある学生が学んでいるため。

訪問期間

2011年2月21日～3月13日

住居・宿泊先

大学内の学生寮

2. 訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

マドリッド自治大学（Universidad Autónoma de Madrid）

規模（学生数など）

大学：23461人（全学部学生数合計）

大学院：1793人

立地（周辺の様子）

マドリッドの中心街から国鉄で30分ほど北の、とても閑静なところにある。住宅地からは離れており、学生は主に車や国鉄を使って通学している。

学部構成

理学部、法学部、哲学文学部、心理学部、医学部、経済・経営科学部、教育学部

学事暦（授業期間／休暇期間）

<2010年度 新制度 Grado>

前期 2010年9月13日～2011年1月22日 試験期間 2月7日まで

後期 2011年1月24日～2011年5月21日 試験期間 6月3日まで

特別学期 2011年6月13日～2011年7月2日

<2010年度 旧制度 Licenciatura>

前期 2010年9月27日～2011年1月18日 試験・レポート期間 2月17日まで

後期 2011年2月7日～2011年5月20日 試験・レポート期間 6月30日まで

特別学期 2011年9月1日～13日

クリスマス休み 2010年12月22日～2011年1月7日

聖週間休み 2011年4月16日～25日

学祭 2011年1月28日

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

スペインの東アジア研究の中心を担う大学であり、学生の中にはすでにほかの学位を取った後に二つ目の専門として東アジア研究科で学ぶ学生もいる。

日本語教育開始年月日

同大学での日本語教育は1978年より国際交流基金の援助を受けて開始された。スペインの大学における日本語教育の先駆けといえる。86年からは同基金の専門家の派遣を受けるようになり、その後1993年より学部の第二外国語科目として開講され、2003年からは哲学文学部に開設された東アジア研究課程の必修科目ともなっている。

日本語学習者数

157人

一クラスの学生数

大学の教育課程が2009年から新しくなって、2010年度現在は旧制度から新制度への移行期間である。制度の異なりによって、学生数などの様子も異なっている。

旧制度 *Licenciatura* の学生は現在3年生以上で、日本語のクラスの学生数は登録が10人弱程度、毎回の出席は5人程度である。制度的に出席が必須ではないため出席人数は少なくなりがちである。

新制度 *Grado* の学生は現在1年生と2年生である。アジア・アフリカ学専攻の学生が必修で履修する「第一言語科目」としての日本語クラスは30名程度である。一方、言語・コミュニケーション学専攻の学生が選択で履修する「第二現代言語科目」としての日本語クラスは、1年生が30名程度、2年生が7名のクラス規模である。

主な開講科目について（科目名・学年・時間数等）

<旧制度 *Licenciatura* 開講科目>

Japonés Intermedio 3・4年生、2時間授業・週2回 登録学生10人、毎回の授業2~4人

Japonés Avanzado 3・4年生、2時間授業・週2回 登録学生9人、毎回の授業3~6人

<新制度 *Grado* 開講科目>

Japonés I-II 【第一言語科目】1年生、1時間授業・週2回+2時間授業・週1回

登録学生 45人、毎回出席約25人

Japonés III-IV 【第一言語科目】2年生、2時間授業・週1回

登録学生 41人、毎回の出席約30人

Japonés I-II 【第二現代言語科目】1年生、2時間授業・週2回

登録学生 45人、毎回の授業約30人

Japonés III-IV 【第二言語科目】2年生、2時間授業・週2回

登録学生 7人、毎回の出席約5人

（制度の移行期間中であるため、履修対象の学生が少ない）

日本語担当教員数

専任（日本人：3名、日本人以外：国籍 スペイン 2名）

非常勤（日本人：2名）

使用教材

主教材：(初級) みんなの日本語 I・II、BASIC KANJI BOOK I・II

(中級) みんなの日本語中級、J BRIDGE

補助教材：授業に応じて

クラスの様子

旧制度 *Licenciatura* のもとで行われている中級以上のクラスは毎回 5 人以下の少人数で、教師と学生が非常に近く、アットホームな雰囲気の授業が行われていた。個々の理解の様子を細かく見ることができると思う。社会人入試の学生もいて 23~65 歳まで幅広い年齢層の中、皆お互い積極的にコミュニケーションを取って助け合いながら授業を受けており、非常にいい雰囲気であると感じた。ただ、日本への留学経験がある学生とない学生との間で、クラス内のレベル差が大きくなってしまっている様子もあった。

新制度 *Grado* のもとで行われている初級のクラスのうち、第一言語科目としての日本語クラスは 30 人規模のものであった。少人数のクラスに比べれば学習が受け身の態勢になりがちな様子が見られたが、それに対しては先生方もペアワークやクラスアクティビティを取り入れるなどの工夫をされていた。全体的に、学生は日本語学習に非常に興味をもって取り組んでいる様子であった。

付属言語教育機関について（訪問国の言語を教えるコースの有無・授業料・授業編成等）

留学生や研究者のためにスペイン語教育を提供する、*Servisio de Inglés* という付属教育機関がある。CEFR のレベル分類に則って、A1、A2、B1、B2 の 4 段階のレベル別に授業が開講されている。最初にクラス分けテストを受けて、それぞれの授業を受けることになる。授業はすべて直説法で行われている。

臨地実習に行くのが望ましい時期

3 月半ば以降は休講期間が入ることがあるため、2 月~3 月初頭にかけての時期が望ましい。

3. 宿泊先について

住居の形態

学生寮 (Residencia Erasmo)

週単位の中期滞在では *Double Room* の一人使いになると思われる。シャワー、トイレ、洗面所、キッチン、テレビ、ソファが付いておりかなり快適である。タオル類も備え付けられている。食器や台所用品、冷蔵庫もそろっているため、自炊をすることができる。部屋では、テレビや無線ネットワーク設備によるインターネットも自由に使うことができる。無線 LAN 対応のパソコンを持って行くといいだろう。週一回、掃除サービスも付いている。宿泊費は毎年更新されるということなので、各自ホームページで確認されたい。

31.5 ユーロ / 1 日

学校までの行き方

学生寮は大学敷地内にある。東アジア研究科 (CEAO) の研究室や日本語のクラスがある哲学・文学部 (*Filosofia y Letras*) の建物までは、徒歩で約 10 分である。

周辺の環境

大学寮は I 棟と II 棟があるが、週単位の滞在ならばおそらく II 棟に住むことになる。大学内にはいたるところに食堂 (Cafeteria) があり、郵便局や薬局、ATM などもあるので便利である。ただ、これらは土日閉まってしまうことに注意が必要である。寮 II 棟の建物内の食堂・購買は土日も利用することができ、基本的な生活用品はそろえることができるが割高である。自炊、その他の買い物には街に出でいかなければならないだろう。最寄りの国鉄 Universidad Cantoblanco 駅は、寮から徒歩 15 分ほどのところにある。国鉄で 5 分、一駅隣の町で買い物ができる。土日は電車の本数が少し減るので注意が必要である。

4. その他、補足事項

天候に関して記しておく。スペインの 3 月はまだ最高気温が 10℃に満たない寒い日もあるため、防寒着を用意していくといいだろう。暖かい日でも日中と日没後の寒暖の差が激しいため、簡単に温度調節できるような服装が望ましい。

また、マドリッドは空気がかなり乾燥している。日本の一般的なマスクのようなものは向こうで売っていないため、持って行くと良いかもしれない。リップクリームやハンドクリームも重宝した。

〈その他研究、実習の成果〉

1. 施設見学に関して

1. 1 内容

UAM に留学している日本人学生、および東アジア研究科のスペイン人学生に大学構内の施設を案内してもらった。パソコンルームがあり学生はパソコンを自由に使うことができる。パソコンの台数はそれほど多くないが、大学構内にはネットワーク設備が整っており、また自由に使える机といすが廊下などの至る所にあるので、自分のノートパソコンで勉強する学生が多い様子だった。学部別に図書館があり、東アジア研究科のある哲学・文学部の図書館には、日本文化や歴史、文学関連の図書などが充実していた。

CEAO の研究室には、みんなの日本語の関連教材はもちろん、その他の様々な日本語教科書や、ビデオ・カセット・CD 教材、みんなの日本語のイラストパネル一式など日本語教材が充実していた。少し古いのが難点と先生方はおっしゃっていたが、多岐にわたっていると思う。

スペイン語教育のための機関も、先生を通じてご紹介いただき、見学させていただくことができた。こちらは各教室にパソコンが 1 台備え付けられており、パワーポイントなどを使った授業が展開されていた。

1. 2 学んだこと

図書館などで所蔵されている本を見ると、語学関係の本よりも歴史や文化、美術などの専門書が充実していた。UAM の日本語教育は東アジア研究科の課程の一部であるので、外国語学部と

して日本語を専門にする場合とは異なり、歴史や文化などの専門分野の研究の一環として日本語が位置づけられているのを感じた。こうした学生の興味関心や学部としての専門分野など、学生の総合的な学びの中での日本語の位置づけを意識しながら日本語教育を提供していくことが重要であると感じた。

また、視覚・聴覚を刺激するさまざまな教材・教具を積極的に用いると、授業が活気づく。パソコンなどの設備があればもちろん便利ではあるが、教師の工夫によるところが大きいと感じた。

2. 授業見学に関して

2.1 内容

3週間を通して、IntermedioII（使用教材 みんなの日本語II）、Intermedio-Avanzado（みんなの日本語II・J BRIDGE）、JaponesII・第一言語科目（みんなの日本語I）JaponesII・第二現代言語科目（みんなの日本語I）、JaponesIV・第二現代言語科目（みんなの日本語I）の見学をさせていただいた。1週目は見学を、2週目からは実習と見学を並行して行った。

2.2 学んだこと

ほとんどすべての日本語のクラスを見学させていただき、人数の多いクラスと少ないクラス、初級と中級、クラス内のレベル差の度合いなど様々な場合に合わせた授業展開の仕方を、幅広く学ぶことができた。

30人程度のクラス規模のJaponesII（第一言語科目・第二現代言語科目）では、いかに学生全員を授業に積極的に参加させていくかを考えること、また学生全体の理解をよく確認しながらすすめていくことが鍵であると感じた。教師から学生へ質問を投げかけて理解を確認するのはもちろんだが、教師と学生一人との個々のやりとりの繰り返しに留まらないようにする工夫が重要である。一人のつまづきを全体にむけてフィードバックしたり、問題を個人で解かせた後にペアやグループで読み練習を兼ねた相互確認を行わせたりすることによって、授業が活性化されていた。このような個々から全体、全体から個々への行き来を意識する方法は大いに参考にさせていただこうと思った。

一方、5人程度の少人数のクラスでは、学生一人ひとりの理解の様子を確認し、また考慮しながら練習を進めていくことが重要であった。教師と学生が親しい雰囲気、物理的な距離も近いクラス環境であることで、学生からの質問も気兼ねなく上がってくる様子であったほか、教師が一人ひとりの練習の進み具合を覗いて確認しながら授業が進められていた。このように教師と学生の距離が近い教室環境にとっても良い効果を感じ、参考にさせていただこうと思った。ただ、先生方のお話によれば、教師が学生とあまり友達のような雰囲気になることも良くないので、適度な距離感を保つことも重要であるとのことだった。

また、クラス内の学生にレベル差がある場合、それぞれの進み具合を見たうえでグループワークを取り入れレベル別に分けて取り組ませていた。これまでの経験においても、レベル差への対応は苦心するところであったが、グループワークやペアワークを有効活用できることを学んだ。

練習にペアワークやグループワークを取り入れるのは、こうしたレベル差への対応のみならず、学生にアウトプットの機会を多く提供するためにとっても効果的である。教科書の練習問題も、ただ解かせて答えを確認するのではなく、ペアをつくるなどして学生同士で理解をチェックさせることで、学生が日本語を使う練習を兼ねることができる。

こうして、あらゆる活動を学生の練習の機会になるようにすることの大切さを認識するとともに、工夫の仕方を学ぶことができた。

3. 教壇実習に関して

3. 1 内容

授業名：JaponesIV（第二現代言語科目）

日付（曜日）：2011-03-04（金） 学生数：4名（+日本人留学生1名）

【授業の内容】

『BASIC KANJI BOOK I』20課 日本の行政区分

市・区・町・村・京・都・府・県・島

『みんなの日本語 I』24課

授受表現「Aはわたしに〇〇を くれます」

【準備】

白地図（日本・都道府県区分/東京都・市町村 23 区区分）、絵葉書（宛名の書き方のお手本提示用）、はがき大の画用紙（練習用）、イラスト教材（あげます・もらいます・くれます）、ぬいぐるみ、「プレゼントゲーム」ワークシート、みんなの日本語 I 「練習」音声テープ、CD ラジカセ

【授業手順】

時間	内容	備考（教材・板書 など）
15:00～ 15分	<自己紹介・質問コーナー> Q Aさんの出身はどこですか。 ⇒Aさんの答えを白地図で確認、板書。	日本人留学生Aさんが今回初参加のため。
15:15～ 漢字 導入 15分	<漢字 20課 日本の行政区分> ・実習生、Aさんの出身を紹介⇒漢字の導入へ ・白地図を見ながら漢字を確認 ・単語導入 市町村、首都、東京都、京都府、兵庫県、23区、 など ・書き順を確認	白地図 ・日本の都道府県、 ・東京都の市町村、23区
15:30～ 練習 30分	☆ Actividad 手紙を書こう ・日本の手紙の書き方 例示：封筒・はがき縦書き・はがき横書き ・画用紙に練習 ⇒実習生の住所宛に手紙を書く	お手本の絵葉書 はがき大の画用紙

<p>16:00～ 既習項 目復習 10分</p>	<p><みんなの日本語>L24 課 ○イラスト提示 AはBにプレゼントをあげました。 BはAにプレゼントをもらいました。 →板書</p> <p>○リレー形式で練習。 1) プレゼントを渡す「どうぞ」「ありがとう」 2) その他の学生が、その状況を描写する。 学生①=プレゼント⇒学生② ①: どうぞ ②: ありがとう ①、②以外の SS : ①さんは②さんにプレゼントをあげました。 ②さんは①さんにプレゼントをもらいました。</p>	<p>イラスト提示 ⇒確認</p> <p>ぬいぐるみ</p>
<p>16:10～ 5分 導入</p>	<p>○新出項目導入 学生④=プレゼント⇒教師 ★「④さんは<u>わたしに</u>プレゼントを<u>くれました</u>。」 →板書 わたしは ____にプレゼントをもらいました。 ◎ ____は<u>わたしに</u>プレゼントを<u>くれました</u>。 (× ____はわたしにプレゼントを<u>あげました</u>。) 例文) 初めてデートしたとき、彼はこのペンダントを くれました。 ○確認 教科書・例文1, 2 読んで、意味と用法を確認する。 ○練習 教科書練習 A</p>	<p>「わたしに」のとき、「くれます」 を使う。「あげます」は使わない。</p> <p>・「わたしに」は省略することも できる。 ・わたし以外にも、私の家族、恋 人、同じ会社の人など『私に近い 人』の時「くれます」を使う。</p>
<p>16:15～ 練習 25分</p>	<p>☆Actividad プレゼントゲーム ・各自、プレゼントを用意する ・いろいろな人とプレゼント交換する。5分 ・誰に何をもらったか、ワークシートに書く。</p>	<p>ワークシートを配布する。</p> <p>キーホルダー、ペン、お守りなど</p>

<p>16:40～</p> <p>練習 2</p> <p>15 分</p>	<p>例) ②さんは (わたしに) ____ をくれました。 ・発表する</p> <p>①: ②さんは (わたしに) ____ をくれました。 T: ①さん、そうですか。 ②: はい。わたしは①さんに ____ をあげました。 SS: ⇒聞き取って、プリントに書く。 ②は①に ____ をあげました。 ①は②に ____ をもらいました。</p>	
<p>練習 2</p> <p>15 分</p>	<p>☆練習 C 聞き取り ・教科書を閉じる</p> <p>カオルさん、レイさんの会話</p> <p>Q レイさんはいつ、誰に、何をもらいましたか。 ・2度、テープを聞く。 ・1文ごとに止めながら聞き、黒板上でディクテーションする。 ・質問に答える。</p> <p>例) レイさんは、卒業式の時、お姉さんにかばんをもらいました。</p>	<p>練習 C の音声テープ</p> <p>・「誰にもらったんですか。」 「～のとき、～がくれたんです」という会話を聞き、「もらう」「あげる」を使って答えさせることで、物のやり取りの方向と表現の使い方の理解を確認する。</p>
<p>16:55～</p> <p>まとめ</p> <p>5 分</p>	<p>○リレー練習</p> <p>学生①=プレゼント⇒学生②</p> <p>①「わたしは②さんにプレゼントをあげました。」 ②「①さんは (私に) プレゼントを <u>くれました</u>。」 …リレー形式で練習。</p> <p>○宿題</p>	<p>ぬいぐるみ (プレゼント)</p>
<p>17:00</p>	<p>各自、誰かがくれたプレゼントを持ってくる。 ⇒次回、それはいつ誰がくれたのか発表する。</p>	

3. 2 学んだこと

- ・漢字指導では、日本人学生の出身地などの生の情報を導入につなげたり、地図など実際にその漢字が使われている実物を提示したりしたことで、印象付けて示すことができた。その漢字をどういうときに使うことができるか提示することで、学習の動機を高めたり、印象に残すことができるだろう。
- ・その漢字を使う単語を提示するばかりでなく、読み書きの練習や確認をもっとしっかりと行ったほうがよかった。黒板に示した漢字・単語をノートに写す時間などはきちんと取るべきだった。
- ・初級の場合、その授業で教える新出項目のポイントを明確にして臨むことはもちろんであるが、

そのポイントを伝えることだけを目的にせず、学生に対していかに練習する機会を提供し、その項目を理解・定着させるかということを中心に臨むべきである。

- ・実際にプレゼントを用意して、動作を加えた状況を設定して練習を行うことで、学生にも楽しく取り組んでもらうことができ、よりスムーズな理解につなげることができたと感じる。ただ、このようなアクティビティを取り入れる場合には、指示の出し方やワークシートの見やすさ、個々がどういう動きをし、どこでつまづきうるかを詳しくシュミレーションしておくことが必要である。

- ・この次の授業も実習として担当させていただくことができたので、複数の時間の流れを考慮した授業展開を学ぶことができた。次の授業での導入を考えて前の時間に宿題を出すなどの工夫ができた。漢字指導では、のちの授業での小テストなども考慮に入れて単語の導入・提示ができるとよかったと反省している。

4. 今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

4. 1 臨地実習の派遣先として

今回は、開講されている日本語の授業を、初級から中級まで、時間が重なっているもの以外すべて見学・実習させていただいた。貴重な授業のお時間の中、実習として、正規の授業の流れの一部を任せてくださった。使用補助教材や練習の方法などについても、実習生の自主的な計画・取り組みを歓迎してくださった。授業前に提出した教案に対し、授業後、コメントなどの丁寧なご指導もいただいた。授業を任せられるということは大きな責任を伴うものの、自分でさまざまな試みをすることができ、やりがいも大きく、多くを学ぶことができる。実習環境としてはこれ以上ないほどの好環境ということができ、お力添えくださった先生方には心から感謝を申し上げたい。

4. 2 全般的に訪問先として

4. 3 本学学生の訪問先への貢献

学生たちは日本語や日本文化への興味関心が強く、理解力も高いものの、授業時の発言などには母語であるスペイン語に頼ってしまいがちな面があった。私のスペイン語は初級程度であったのだが、むしろスペイン語が全くわからない日本人実習生として授業に臨んだことで、学生たちには、何とかして日本語でコミュニケーションを図らなければならないという、良い意味での緊張感を与えることができたと感じる。さらに、当然ながら直接法で授業を行ったが、特に中級以上の学生には、日本語だけの授業も充分理解できるという自信を与えることができたのではないだろうか。

また、学生の日本語学習のきっかけは、日本の伝統文化やポップカルチャーへの興味であることが多い。彼らはインターネットから情報を得ているが、実際に日本を訪問する機会、日本人と接する機会は少ないようで、実習生を大変歓迎してくれた。日本との交流を身近にするという意味でも、訪問先への学生に貢献できたのではないかと思う。

4. 4 今後の課題・提案

UAM での実習では、先生方から、使用する補助教材や練習方法などは自由にしてよいと任せていただいた。今回は『直接法で教える日本語』（東京外国語大学出版会）のイラストカードや、『みんなの日本語 I・II』の付属 CD・カセットなどを利用して実習授業に取り組んだが、せっかくの実習なので、もっといろいろな補助教材を使った授業を試みても良かったと感じている。日本語の先生方の研究室には、ビデオ・カセット・CD 教材、イラストパネル、その他種々の教科書が備えられているので、それらをもっと積極的に見せていただいて検討し、使うことができたなら良かった。あるいは、事前に実習で担当する課や文法を教えていただいた授業については、実習先に向かう前に、主教材の『みんなの日本語』のみならず、ほかの教科書・補助教材にもあ

たって準備をしてくれば、もっと幅広い発想で実習に取り組むことができたように思う。

また、実習準備をするにあたって、日本の雑誌や新聞、広告、日本語の日本地図や路線図のようなもの、短い読み物、あるいは漫画などを日本から持って来れば良かったと痛切に感じた。日本語の学習動機が日本のポップカルチャーだという学生も多く、レアリアはそのような学生の興味関心を刺激するのに使えるし、補助教材としても使うことができるので、できる限り持って行ったかったところである。今回は特に、3月3日ひなまつりが実習期間中にあつたので、それに関する広告や写真などを用意してくることができればなお良かっただろう。

今回の実習は3週間と比較的長い期間受け入れていただいた。この期間を最大限に活かそうと動いたのは良かったが、3週目に体調を崩してしまい、予定されていた実習ができなくなるなどご迷惑をおかけしてしまった。見学、実習準備、学生との交流など、できる限りたくさんのご経験を体験・吸収してくるべきところだとは思いますが、それには体力も使うので、特に後半の体調管理には十分気を付けるべきだろう。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期過程
言語応用専攻日本語教育学専修コース

5110015

ソ・アルム

<訪問先の情報>

1. 訪問に関する一般情報

訪問地（国・都市）

オーストラリア・キャンベラ

訪問校・訪問先

オーストラリア国立大学(Australian National University)

訪問先を選んだ動機

オーストラリア国立大学は、オーストラリア国内で日本語教育が優れている大学で、カリキュラム構成や教授法などにおいて他大学との差別生を持っているところである。オーストラリア国立大学の持つそのような特徴を経験したいという希望から、実習先をオーストラリア国立大学を選ぶことになった。

訪問期間

2011年3月3日～3月21日

住居・宿泊先

大学内の宿舎 Liversidge Court

2. 訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

オーストラリア国立大学(Australian National University)

規模（学生数など）

スタッフ数：3,945 人

学部生数：9,873 人

大学院生数：7,554 人

立地（周辺の様子）

キャンベラ市内から近いところに位置している。市内まであるいていけるのがメリットである。キャンベラ空港からはタクシーで 15 分ぐらい（25AUD 程度）かかる。非常に便利な一条件であると言える。

学部構成

人文科学群、アジア太平洋学群、経済学・商学群、情報科学・工学群、法学群、医学・生物学・環境科学群、物質科学・数学群などの学群に構成されている。

学事暦（授業機関／休暇期間）

2 月下旬から 6 月上旬までが前期、後期は 7 月下旬から 10 月下旬までである。前期の休み期間は約 6 週間、後期の休み期間は 3 ヶ月程度である。

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

オーストラリア国立大学は、世界大学ランクもかなり高く、国内でも国外でも有名な大学である。つまり、レベルの高い大学であると言える。ANU のキャンパスは、とても広く、オープンな感じなので、どこからも入れるのが特徴である。大学内の建物は、各学部のビル、学生宿舎、そして便宜施設などで構成されている。

日本語教育開始年月日

Japan Centre は、1960 に設立され、そのときから日本語教育を励んでいる。

日本語学習者数

約 380 人

一クラスの学生数

大講義は 6~70 人、チュートリアルは 15 人で構成されている。

主な開講科目について（科目名・学年・時間数等）

開講科目一覧を別紙 1 として添付する。

日本語担当教員数

専任（日本人：2名，日本人以外：国籍韓国、アメリカ、モンゴル、オーストラリア 6名）

非常勤（日本人：7名，日本人以外：国籍韓国 1名）

使用教材

初級クラスである Spoken Japanese 1, 2 では、「日本語がいっぱい」を使っている。中上級である Spoken Japanese 3,4 では、「Yookoso: Continuing with Contemporary Japanese」を使用している。

クラスの様子

学生たちのレベルは、初級でもかなり高いと言えるぐらいのものであった。クラスの中では、中学校や高校から日本語を学習してきた学生もいる一方、大学に入ってから日本語を勉強し始めた学生もいたため、レベルが少し混ざっている状態であった。しかし、そのような要素が授業を妨げたりはしなく、皆積極的に質問したり、授業に参加していたので、とても良い雰囲気を作られていた。

付属言語教育機関について（訪問国の言語を教えるコースの有無・授業料・授業編成等）

付属言語教育機関で英語やヨーロッパ圏言語を学習することができるのが特徴である。

臨地実習に行くのが望ましい時期

学期が 2 月下旬に始まるので、学期の初め頃に行った方がいいと思われる。

3. 宿泊先について

住居の形態

大学内の宿舎 Liversidge Court

キッチン、リビング、バルコニー、ベッドルーム、バスルーム（シャワー付）が用意されている広い部屋。自炊ができて便利。

109AUD/1 日

学校までの行き方

宿舎が大学内にあるので、Japan Centre のオフィスまで歩いて 10 分程度かかる。

周辺の環境

宿舎の周りの全体的雰囲気は、緑に囲まれていて、とても穏やかな感じであるといえる。

5. その他、補足事項

- ・近くにスーパーがないのは少し不便であった。食材を買うときは、キャンベラセンターにある SUPABARN という大型スーパーや学校の近くにあるスーパー (IGA) を利用した。近くにあるスーパーは歩いて 15 分程度。
- ・宿舎の近くに University House という別の宿舎があり、その中にバーやレストランなどを利用することも可能。営業時間が曜日によって異なるので、事前に調べる必要がある。
- ・宿舎から 15 分ぐらい歩くと、オーストラリア国立博物館 (NMA) があるので、週末などを利用し、訪問してみることもよい。
- ・宿舎のすぐ前にバス停がある。キャンベラセンターや国会議事堂まで行くバス (平日 3 番、週末 934 番) で、片道 2AUD で乗車できる。注意すべきところは、バスが来るのを見て手を上げたりするなど、運転手にサインを送らなければならない。「Signal Bus」と書いてあるバス停では、そうしないとバスが止まらないので気をつけること。

〈その他研究、実習の成果〉

1. 施設見学に関して

1. 1 内容

最初、Japan Centre のオフィスがある Baldessin Precinct Building(以下 BPB)を案内してもらった。ANU の日本語学科の授業は、BPB 以外にも、A.D Hope(ADH), Copland(COP), Ethel Tory Centre(ETC), Haydon-Allen(HA)でも行われている。チュートリアルを担当する非常勤講師の方と同じ部屋を使うようにしてもらったので、毎日 BPB に行って日々の確認し、授業見学や教団実習の準備を行った。

2. 2 学んだこと

日本への留学生を対象とした日本語教育のために一つの立派な校舎が設けられており、東北師範大学が日本語教育に大変力を入れている様子が伺える。先生方の日本語能力も大変高く、また東京外国語大学の留学生日本語センターからも講師が派遣されている。

2. 授業見学に関して

2. 1 内容

主に見学した授業は、教壇実習で担当することになった Spoken Japanese 1 の授業だった。ANU の日本語授業は、レクチャーと、レクチャーで学んだ項目が練習できるチュートリアル授業で構成されている。レクチャーは、大講義の形で行われ、基本的な文法項目を取り上げ、簡単に

練習問題を一緒に解くような流れとなっている。チュートリアルは、「表現」、「対話」、そして「聞き取り及び日本文化学習」に構成されていて、レクチャーで学んだ項目を用い、学生がちゃんと使えるように練習をさせる。

2. 2 学んだこと

ANU の会話授業では、まず学生にたくさん聞かせ、耳に慣れてくるようにすることを目的としている。よって、レクチャーも、チュートリアルクラスも、学生たちに授業項目として取り上げられている内容をまず聞かせ、その後練習をさせ、どんどん使えるようにしている。私が日本語を学習するときは、最初文法の方に中心を置いて、会話の練習にあまり時間を費やしていなかったのので、まず学生にターゲット表現を「聞かせる」こと、そして繰り返して練習をして「慣れてくる」ようにすることの重要性が分かってきた。

3. 教壇実習に関して

3. 1 内容

3 週間の実習期間中に、初級会話 4 コマ（表現 2 コマ、対話 2 コマ）を担当した。以下に、その教案を示す。

<表現クラス> - 3月15日 火曜日、2コマ（1コマ 50分）

	時間	やること	使うもの
1	5 min. (-:10)	(テストの前、簡単に挨拶をする) お元気ですか? その後、何かをピックアップする。(天気など) 単語テスト 5分 出席確認、今日の授業内容について喚起(黒板に書いておく) ①～は～にあります/います ②Location Words うえ、した、なか、そば、となり、まえ、うしろ	テスト用紙
2	25 min. (-:35)	①～は～にあります/います a. 導入 1. XはYにあります。	PPT 絵カード

		<p>、</p> <p>「XはYにあります」の文型に沿って話す。</p> <p>学生が先生に続いて読み上げることができるようにする。</p> <p>(テキストの例文、PPT)</p> <p>シドニー—オペラハウスはシドニーにあります。</p> <p>エジプト—ピラミッドはエジプトにあります。</p> <p>ふじさん—ふじさんはにほんにあります。</p> <p>英語で文型をまとめながら、どのようなときに用いられるか説明する。</p> <p>きょうと—わたしのだいがくはきょうとにあります。</p> <p>とうきょう—わたしのいえはとうきょうにあります。</p> <p>→ PPTを提示しながら例文を読む。</p> <p>2. XはYにいます。</p> <p>(テキスト、PPT)</p> <p>としょかん—たなかさんはとしょかんにいます。</p> <p>ちゅうごく—なかむらさんはいまちゅうごくにいます。</p> <p>タイ—やまださんはいまタイにいます。</p> <p>たなかさんのいえ—わたしのいぬはいまたなかさんのいえにいます。</p> <p>Grammar Exercise 1 (3分)</p> <p>問題の例文と一緒に読んでから問題を解かせる。</p> <p>終わったらランダムに学生を指し、発表させてもらう。(2分)</p> <p>3. ～はどこにありますか？ (PPT)</p> <p>簡単に説明し、一緒に例文を読む。</p>	
3	15 min. (-:50)	<p>②Location Words</p> <p>うえ、した、なか、そば、となり、まえ、うしろ</p> <p>a. 導入</p>	

		<p>「うえ、した、なか、そば、となり、まえ、うしろ」の概念を実物 を利用し、学生に提示する。 (りんご、ぼうし、はこ、つくえ、いす)</p> <p>(実物提示) これは何ですか?りんご、つくえ これはなんですか?ぼうし、はこ</p> <p>机の上/下 椅子の前/後ろ 机のそば 椅子のとなり はこのなか などを繰り返し練習させる。</p> <p>「～は～にあります」をもう一度使い、練習。</p> <p>(Grammar Exercise 2 の絵、OHP シート) 単語を確認。(OHP シート) 練習。「～どこにありますか?」を用い て学生に答えてもらう形にする。 例文) ほんはどこにありますか?ほんはテーブルの上にあります。</p> <p>時間があれば例文と一緒に読む (41 ページ)</p> <p>③ 活動 Expression Exercise 3 (3分) 発表させてもらい、確認する (2分)</p>	
4	5 min. (-:55)	<p>まとめ: 今日学習した内容を確認する 質問確認、挨拶で終わらせる</p>	

<対話クラス> - 3月16日 水曜日 2コマ (1コマ 50分)

	時間	やること	使うもの
1	5 min. (-:10)	挨拶、自己紹介 ひらがなの練習	
2	25 min.	<Pair Practice 1>	絵カード

	(-:35)	<p>Pre Task (10分) ペア練習をする前に、学生に絵を見せながら「～はどこにありますかいますか」とキューを出し、答えてもらうようにする。</p> <p>1. ～はどこにありますか (5つ) (PPT) ANU、東京タワー、ピラミッド、ハーバーブリッジ、金閣寺</p> <p>2. ～はどこにいますか (5つ) (絵カード) たなかさん、いしゃ、いしださん、なかむらさん、さとうさん</p> <p>3. Location Words ～はどこにありますかいますか(絵カード) かびんはテーブルのうえ かばんはテーブルのした たなかさんはさとうさんのまえ ほんはかばんのなか すずきさんはなかむらさんのとなり など</p> <p>Main Task (10分、練習時間を含む) ペア練習の問題を読み上げ、例文と一緒に読み、どのように行うかもう一回説明する。 (44ページの絵をOHPで)</p> <p>Post Task (3～4分) ペア練習行ったもあのを、発表させる。全員、ランダムに指定 *学生が分からなそうな単語は説明する。</p>	PPT
3	15 min. (-:45)	<p><Pair Practice 2> Pre Task (6分)</p> <p>「～があります」の使い方を説明。</p> <p>Expression Exercise 4 をみんなで一緒に (2)、(3)、(5)、(7)</p> <p>1. 田中さんの絵 (O、X)</p> <p>田中さんは、車がありますか？ 田中さんは、自転車がありますか？など。</p>	絵カード 単語カード

		<p>学生に質問し、答えてもらう。</p> <p>はい、あります。</p> <p>いいえ、ありません。</p> <p>2. きょうはパーティがありますか。 あしたはアルバイトがありますか。 こんやはパーティがありますか。</p> <p>各質問に答えてもらう。</p> <p>3. 語彙の確認 (単語カード) じてんしゃ、いぬ、きょうだい、コンピューター、くるま、おねえさん、日本語の辞書、けいたいでんわ、ねこ</p> <p>Main Task 入る前に、ペア練習の問題を読み上げ、例文と一緒に読み、どのように行うかも一回説明する。</p> <p>Post Task : ペア練習行ったものを、発表させる。全員、ランダムに</p>	
4	5 min. (-:55)	質問確認、挨拶をして終らせる。	

3. 2 学んだこと

- ・学生が理解しやすくするために、PPT や OHP、絵カードのような資格資料を使用することに工夫した。教科書に提示されている例文を絵カードにするなど、なるべく分かりやすく授業項目を取り上げた。
- ・授業は、日本語が 70%、英語が 30%の割合で行われた。説明のときに英語を使って簡単に説明し、日本語で表現の練習を行った。発音や声の大きさに注意を注ぎ、明確できれいに話すようにした。
- ・教壇実習当日に、表現クラスと会話クラスの担当先生がどのように授業を行うか一回参観させてもらい、その後実習を行った。この過程を通じて、自分が書き直した教案の最終確認ができたと思う。
- ・教案通りに授業ができ、時間配分もうまくできた。
- ・身振り手振りを適宜使うようにした。

・チュートリアルクラスは、大講義で学習した内容を練習することが目的である。よって、教師は、個々の学生が練習の際、正確にその表現を使っているか確認する役割をちゃんと果たさなければならない。気を遣おうとしたつもりであったが、授業項目の導入や流れに集中しすぎて、そこまで気が及ばなかったときが何回かあった。その点においては、より工夫する必要があると考えられる。

4. 今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

4. 1 臨地実習の派遣先として

派遣先が決まったあと、Japan Center 主任の方と一回東京で打ち合わせを行い、どのコースで教壇実習を行うか決めた。そこで、初級会話クラスを担当することになり、出発前に資料をもらったりして、教壇実習における教案作成などを事前に準備することができた。それから派遣再帰に渡り、先生方の授業を見学しながら自分の教案を訂正し、先生方に見てもらい、書き直すなど、先生方のお陰で授業準備が最もスムーズにできたと思う。また、教壇実習を行う前に、先生たちの前で模擬実習を行い、点検してもらった。このような流れで実習準備が行われたので、教壇実習を成功的に成し遂げることができたと思う。よって、今回の実習先としてとても適切な選択であったと考えられる。

4. 2 一般的に訪問先として

オーストラリアの首都、キャンベラに位置づけられているオーストラリア国立大学は、位置条件を始め、全ての側面で学習しやすい環境が造成されている。そのため、自分もちゃんと勉強できたと思う。また、宿泊先もとても充実されていたので、生活しやすかった。全体的にとってもよかったと思っている。

4. 3 本学学生の訪問先への貢献

本学の学生は、実習先の学生たちとの交流を通じて貢献できる点があると思う。同じ世代の日本語母語話者及び外国人日本語学習者に会い、交流する機会が得られるということは、訪問先の日本語学習者にとってとても大切な経験となると思う。

5. 4 今後の課題・提案

出発前にいろいろ準備をしてからオーストラリアに行ったが、まだ準備不足のところはかなりあったので、その点に関しては気をつけるべきであると思う。また、初級のクラスでは、日本語が70%ぐらいで、英語による説明が2~30%ぐらいを占めているので、英語ができた方がよりスムーズに授業を行うことができると思われる。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士後期課程

言語文化専攻

5409007

鄭賢兪(ジョン・ヒョンア)

<訪問先の情報>

1. 訪問に関する一般情報

訪問地 (国・都市)

中国・香港特別行政地区

訪問校・訪問先

香港大学文學院現代語言及文化學部日本研究學科

訪問先を選んだ動機

日本・韓国・中国は同じ漢字文化圏で、特に、香港は中国とイギリスの両方の文化圏からの影響により独特な特徴を持っている都市である。更に、ほとんどの国民が広東語と英語の両言語を駆使できるので、欧米文化圏と漢字文化圏での日本語教育を同時に体験できると思われて興味を持つことになった。

訪問期間

2011年3月7日～3月11日

住居・宿泊先

Garden view Hotel

2. 訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

香港大学文學院現代語言及文化學部日本研究學科

規模（学生数など）

21,652名(学部生 11,962名、大学院生 9,690名)（2009年度）

立地（周辺の様子）

香港島の経済中心地である高層ビル地域から西へ少し離れた住宅地に位置している。この住宅地は山に沿って建てられているので、急傾斜が多い。また、主な交通手段はバスである。香港大学も山の中腹にあるため、大学キャンパス内は階段、エスカレータ、エレベータを使うことが多い。

学部構成

文學院(日本研究學科がある)、建築學院、經濟及工商管理學院、齒醫學院、工程學院、法律學院、李嘉誠醫學院、理學院、社會科學院、教育學院がある。

学事曆（授業期間／休暇期間）

前期：9月1日～11月末

Reading Week 10月中旬

試験 12月頭～中旬

後期：1月中旬～4月末

Reading Week 3月頭

試験 5月頭～中旬

* Reading Week：テストなどがあり、通常授業はない。

* 学期が始まって2週間程度は、聴講等をしながら履修科目を決定する。

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

香港大学 1910年に創立された香港で最も歴史の古い総合大学である。香港を代表する大学であり、中国のみならず、アジアの大学の中でもレベルが高い大学として知られている。殆どの授業が英語で行われている。

日本語教育開始年月日

1985年(日本研究學科創立年)

これより以前から香港大学の language centre では、1970 年代頃から日本語教育が行われていた。

日本語学習者数

約 420 名(日本語を単位として取っている主専攻、副専攻の学生数)

一クラスの学生数

5 名～40 名(日本語スキルクラスは 5～6 名程の小人数で行われるし、その他は学年や科目によって異なる。)

主な開講科目について (科目名・学年・時間数等)

Japanese Language I 1 年生 教科書中心(週 4 時間) スキルクラス(週 2 時間)

Japanese Language II 2 年生 教科書中心(週 4 時間) スキルクラス(週 2 時間)

Japanese Language III 3 年生 教科書中心(週 4 時間) スキルクラス(週 2 時間)

Japanese Language IV 4 年生 教科書中心(週 4 時間) スキルクラス(週 2 時間)

⇒つまり、一日 2 時間、週 3 回開講される。

*日本語の既習者が入学した場合、学科の許可を得て Japanese Language II から始まる場合もある。

*Japanese Language IV の 4 年生のクラスは、1 年間の日本への交換留学を終えた者が対象となる。

日本語担当教員数

専任 (日本人：8 名, 日本人以外：香港国籍 1 名)

使用教材

1 年生：『みんなの日本語初級 I』を主教材とし、その他自作教材等

2 年生：『みんなの日本語初級 II』を主教材とし、その他自作教材等

3 年生：『日本語中級 J301』、『日本語中級 J501』、『大学・大学院留学生の日本語』を主教材とし、その他自作教材等

クラスの様子

授業によって人数も雰囲気も違うが、全体的に見て積極的に日本語学習に取り組んでいると思われた。授業ではパソコン、PPT、OHP、スクリーン、視聴覚機器等が用意されているので、多様な授業活動ができるし、学習者になるべく多く発話するように誘導する方式がほぼ全ての授業で行われていて、全体的なクラスの雰囲気はいいと考えられた。学習者同士がペアで話し合いする場合でも日本語で話そうとする努力が見られた。1 年生の場合、分からない部分は英語や広東

語を使う学生も結構あったが、段々上の学年になるとそのような現象はなくなり、特に留学を終えた日本語Ⅳのクラスは冗談や笑い話等の些細なことも全部日本語で話そうとする学生もあり、活発に授業活動を行っていた。

付属言語教育機関について（訪問国の言語を教えるコースの有無・授業料・授業編成等）

香港大学の生涯学習センター(SPACE)で広東語を習うことができる。基本的に香港在住の社会人が対象である。

臨地実習に行くのが望ましい時期

一週目を除いた3月が一番望ましいと思われるが、学期初2週間くらいは聴講し授業を決める期間があるのでその期間と Reading Week 期間、試験期間は避けた方がいいであろう。

3. 宿泊先について

住居の形態

大学まで歩いて通学できるホテルは今回満室だったため、バスで15分ぐらいかかるホテルに泊まった。一泊900香港ドル(朝食付きではない)で快適な部屋だった。ホテル内はスーパーやコンビニ等はなかったが、すぐ隣の建物にスーパーがあつて水や食品等を購入したので不便は感じなかった。部屋でインターネットは接続できるが、高額だったため利用することはできなかった(大学の事務室で許可を頂いて使用することはできた)。

学校までの行き方

ホテルから歩いて3~4分程度にバス停留場があり、23番バスに乗って15分ぐらい行くと、香港大学の正門に到着する。このバス路線に学校が結構あるのか、中・高校の学生達から大学生までバス利用客は殆んど学生である。

周辺の環境

ホテルがある地域は、山を削って建てられた急傾斜の地域で、周辺は高層マンションやビルだった。近所にスーパーやいくつかのレストランがあつたが、外食をするためには市内へ行った方がいいと思われる。最寄り地下鉄駅は Central 駅で徒歩で15分ぐらいかかる。しかし、バス停留場までは徒歩で1分距離と3~4分距離の2か所があつたのでバスを多く利用した。

4. その他、補足事項

3月の2週目が実習期間だったが、この時期の気候は、日本の初秋程度の気候だと思われる。朝・晩は肌寒いが、昼は暑く感じられるぐらい暖かいので、簡単に着て抜ける服を持って行った方がいいと思われる。

〈その他研究、実習の成果〉

1. 施設見学に関して

1. 1 内容

香港大学は総合大学なので、様々な講義棟がある。また、山の斜面で建てられた大学なので、建物が殆ど高い所に位置している。なので、学内は階段、エスカレータ、エレベータを使うことが多いが、授業を連続して受講している学生達は移動するのに時間がかかるし、結構大変だろうと思った。学内には図書館、食堂三ヶ所、コーヒーショップ、小さなスーパーマーケット、ATMなどがあった。

日本研究学科は、KK Leung Building、Chong Yuet Ming Chemistry Building、Meng Wah Complex、University Main Building の4か所の講義棟で授業が行われていたが、殆どの授業は、KK Leung Building で行われる。日本研究学科は5~15名くらいの少人数で授業が行われ、殆どの教室はAudio 施設とスクリーン、PC、OHP 機材等が備わっていた。KK Leung Building の講義棟では主に、15名以下の少人数の授業を行う場合多く利用され、30~40名くらいのクラスは他の講義棟の大きな教室が利用された。その場合も視聴覚機材が備わっていて、語学を学習するには良い環境だと思われた。

外国語授業が行われるKK Leung Building の6階には学生達が自由に自ら視聴覚機材が使用できるパソコンやDVD 機械、グループ自習室、小さな図書館等がある。

2. 2 学んだこと

ほとんどの教室には、PC、スクリーン、スピーカー、実物投影器などが備わっていたので、教員側も多様な資料準備ができるし、更に授業を行う際にも4技能(聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと)が使用できる様々な活動の授業を行うことができると考えられた。また、学生側も様々な視聴覚教材で日本語を学習することができるので、理解力、運用力等を伸ばすことができるのではないかと思われた。

2. 授業見学に関して

2. 1 内容

今回の実習では以下の9クラス(授業時間：50分授業+10分くらい休み+50分授業)授業見学を担当の先生に組んでいただいた。

【授業見学①】

- ・ 授業日時：2011.3.7 15:00~16:50
- ・ 科目名：日本語 I 文法
- ・ 対象学習者：学部1年生
- ・ 教材名：『みんなの日本語初級 I』を主教材とし、その他自作教材等
- ・ 担当先生：日本国籍の先生

- ・出席学生数：15名程度
- ・使用機器：パソコン、OHP、スクリーン、絵カード等
- ・授業の進め方：最初に単語チェック・説明・発音練習が行われた後、新出語彙・新出文法が導入されていった。ペアで練習させた後、新出文法が使用される場面でのロールプレイを行っていた。また、教科書の練習問題を使ってもう一回文型を理解させた。授業では英語と日本語が使用されていて、文法の難しい説明は英語を使い、それ以外は大体日本語で使われていた。

【授業見学②】

- ・授業日時：2011.3.8 9:30～11:20
- ・科目名：日本語Ⅱ 文法
- ・対象学習者：学部2年生
- ・教材名：『みんなの日本語初級Ⅱ』を主教材とし、その他自作教材等
- ・担当先生：日本国籍の先生
- ・出席学生数：8名程度
- ・使用機器：パソコン、OHP、スクリーン、絵カード等
- ・授業の進め方：絵カードを利用し新出文法を導入し意味を説明した後、教科書の練習問題と絵カードを使用してペアで練習させたり、一人ずつ練習させたりしてから、全体的に確認をした。その後、新出文法と混乱しやすい文法を比較しながら説明・練習させていて新出文法を使用する際に注意すべき点等を説明し練習させた。最後に映像を通して実際使われる場面を視聴させた後、その内容でもう一回練習させた。

【授業見学③】

- ・授業日時：2011.3.8 15:00～16:50
- ・科目名：日本語Ⅲ
- ・対象学習者：学部3年生
- ・教材名：『日本語中級J501』を主教材とし、その他自作教材等
- ・担当先生：香港国籍の先生
- ・出席学生数：40名程度
- ・使用機器：パソコン、PPT、スクリーン等
- ・授業の進め方：PPTを利用しテストの課題の解説、復習が行われ、特に間違いが多かった問題をもう一回学生達に質問しながら確認した。その後、日本語で書かれた生教材を使用し、文章を読ませながら、似たような表現を取り上げ、その違いを学習者に認識させ、全体的な意味を把握できるように練習させた。

【授業見学④】

- ・授業日時：2011.3.9 10:40～12:30
- ・科目名：日本語Ⅳ Writing

- ・対象学習者：学部4年生(日本に1年間留学し、3年生になった学生)
- ・教材名：自作の生教材(詩・俳句・文学作品等)
- ・担当先生：日本国籍の先生
- ・出席学生数：17名程度
- ・使用機器：パソコン、PPT、OHP、スクリーン等
- ・授業の進め方：学生達を書いた「俳句」の内容を確認・修正が行われ、その後、「もしも〇〇が〇〇だったら、〇〇は〇〇だろう(だっただろう)」という文型が使われた詩で導入が行っていった。全員でこの文型を使用し詩を作成するように時間を与えた後、学生達を書いた詩を見しながら面白い点や修正すべき点、ポイント等を確認していく授業であった。

【授業見学⑤】

- ・授業日時：2011.3.9 14:00～15:50
- ・科目名：日本語Ⅳ 会話
- ・対象学習者：学部4年生(日本に1年間留学し、3年生になった学生)
- ・教材名：自作の生教材
- ・担当先生：日本国籍の先生
- ・出席学生数：10名程度
- ・使用機器：パソコン、PPT、スクリーン等
- ・授業の進め方：香港で活躍している日本人を対象に2人1組でインタビューを行い、それをまとめて発表するが、その前に「報告の仕方」についての注意点・プロセス・報告表現等をPPTを使って説明した。その後、ペアで「報告発表」のための打ち合わせを日本語でするように指示して、先生は各ペアの打ち合わせの内容等を確認し問題点を指摘していた。

【授業見学⑥】

- ・授業日時：2011.3.10 10:30～12:20
- ・科目名：日本語Ⅱ スキル
- ・対象学習者：学部2年生
- ・教材名：自作の生教材
- ・担当先生：香港国籍の先生
- ・出席学生数：5名程度
- ・使用機器：パソコン、OHP、スクリーン等
- ・授業の進め方：導入で実際の香港の3月気温のグラフを使用し、グラフや図を見る方法と説明するために使われる表現を説明した後、ペアで練習させてから発表が行われた。この授業は、実際のデータを正確にみるスキルとそれを適切な表現を使い説明するスキル、更に、自分なりに考えてどのように説明するのがいいかを工夫させること等、全体的な運用力をアップさせることに焦点を当てていた。

【授業見学⑦】

- ・ 授業日時：2011.3.10 15:00～16:50
- ・ 科目名：日本語Ⅲ 会話
- ・ 対象学習者：学部3年生
- ・ 教材名：自作の生教材
- ・ 担当先生：日本国籍の先生
- ・ 出席学生数：6名程度
- ・ 使用機器：パソコン、スクリーン等
- ・ 授業の進め方：ディスカッションをするために使用される表現をまず説明した後、「日本語学校を作ろう」というテーマのシミュレーションを行った。経営者・学生・教師の立場からのことを学生達に考えさせてからペアでお互いの意見等話し合いするようにして、先生はそれを確認、質問、表現の訂正、問題点等の指摘をしていた。

【授業見学⑧】

- ・ 授業日時：2011.3.11 10:30～12:20
- ・ 科目名：日本語Ⅰ スキル
- ・ 対象学習者：学部1年生
- ・ 教材名：自作の生教材
- ・ 担当先生：日本国籍の先生
- ・ 出席学生数：12名程度
- ・ 使用機器：パソコン、PPT、OHP、スクリーン等
- ・ 授業の進め方：1年生でもスキル授業は教科書を使用せず自作の教材で運用力をアップさせる授業が行われていた。例えば、「趣味について」のテーマで先生と話し合いしたりペアで話し合いしたりロールプレイをしたり学生同士でインタビューをしたりする様々な活動をしていた。授業では英語と日本語が使用されていて、文法の難しい説明は英語を使い、それ以外は大体日本語で使われていた。

【授業見学⑨】

- ・ 授業日時：2011.3.11 14:00～15:50
- ・ 科目名：日本語Ⅲ
- ・ 対象学習者：学部3年生
- ・ 教材名：『大学・大学院留学生の日本語』を主教材とし、その他自作教材等
- ・ 担当先生：日本国籍の先生
- ・ 出席学生数：40名程度
- ・ 使用機器：パソコン、OHP、スクリーン等

・授業の進め方：前回のテストの解説、復習が行われ、その後、「新聞に投書するための書き言葉の練習」というテーマで説明や練習が行われていた。「話し言葉」と「書き言葉」についての使い分けを文末詞・接続詞等を通して習得させた後、練習問題で細かくチェックしていく授業であった。

2. 2 学んだこと

どのクラスも使用する言語だけではなく PPT や OHP 等の機材を利用し運用能力を高めるために会話するものが多かった。先生と学生との会話、ペアで学生同士の会話、学生同士のインタビュー会話、学生同士の打ち合わせ等ただ聞いて理解させることではなく、それを実際に使用し運用力を習得させるための工夫が様々な面で見られた。説明する時間、会話する時間などが授業の中でうまく配置され、学生たちがあきることなく集中して授業を聞いていたと思われる。その流れが自然に行われていたので、この自然さも先生方の工夫だと考えられた。香港大学では特に教え方に関する決まりはあまりないようで、先生方に任されているようであった。そのため、今回の授業見学でいろいろなタイプの授業の流れや導入の仕方などを学ぶことができ勉強になった。

3. 今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

3. 1 臨地実習の派遣先として

今回の臨地実習は私の個人的な都合により 5 日間しかできなかったもので、模擬授業をすることより現地の先生方の授業見学を通じて、授業進行方式などを習得することに焦点を当てた。先生方の配慮により全てのレベル(1・2・3・4年生)の様々な授業を午前・午後、一日 2 回ずつ見学することができ、非常に有意義で、これからの日本語教育を現場で行う際に何が重要なのか、何をすべきなのか、何を注意しなければならないのか等を自分なりに考えることができた貴重な時間だった。

3. 2 全般的に訪問先として

香港大学の日本研究学科の学部生たちは、優秀で積極的な学生が多いという印象を受けた。また、先生方は基本的な主教材を中心に自作した多様な副教材を使用し授業を進み、特に、全てのレベルの授業が体系的に理解させ、段々会話ができるようにテンポよく自然に進行されていた。また、学生達が集中できるようペアで話しさせたり、一人ずつ答えさせたりする方式が適切に授業の中に組み込まれ、学生達が最後まで集中して授業に臨むようにする工夫がたくさん見られた。学習環境、授業環境全て臨地実習の訪問先として適切だと思われた。

3. 3 本学学生の訪問先への貢献

臨地実習期間が短かったので学生達と交流する時間が少なかったのが残念であった。私も日本語ネイティブではないので日本での就職方法、アニメや映画等の日本文化に関する具体的な情報

は提供することはできなかったが、留学生の立場で、日本へ留学する際の情報や注意点、日本の大学や大学院に入学する方法、留学生に関する支援情報など、私が感じたことを話し合いすることはできた。香港大学の学部生は日本留学についても結構考えているので、それに関する具体的な情報を共有することができた点はよかったと思われる。

また、初級学生達は日本語で会話する際、分からなかったらすぐ英語や広東語に変えて話そうとする傾向があったが、私と会話するためには日本語だけ使わないといけないので、実際日本に留学したら、このように日本語だけで自分の意思を話さないといけない環境の難しさを少しは経験したのではないかと考えられる。このような刺激は学習動機誘発にも良い影響を及ぼしたと思われる。

3. 4 今後の課題・提案

香港大学は他の臨地実習先と比べると距離上日本と近いので短期間でも臨地実習を経験したいと思う学生も参加できる長所があると思われる。しかし、模擬授業や多様な活動を学び経験したいなら少なくとも2週間以上は滞在するのがいいと思われる。また、「日本語教育」を習っている外国人留学生達は、臨地実習を通じて、現地の日本人先生と現地人先生の授業方式等を経験することができ、そのスキル等を学べる良い機会だと思われる。このような教育現場を体験することによって母国での日本語教育をどのようにすればいいのか、自分の教え方には問題がないのか、このような問題を解決するためには何が必要なのか、現地人日本語先生としての長所と短所は何か等について自ら考える時間になるであろう。また、忙しい先生方に迷惑をかけないように現地語と英語が可能ならなるべく自ら資料収集や調査をするのがいいと考えられる。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期過程
言語応用専攻日本語教育学専修コース

学籍番号 (5110013)

氏名：臧 子芸 (ゾウ シゲイ)

<訪問先の情報>

1. 訪問に関する一般情報

訪問地 (国・都市)

ニュージーランド・ウェリントン

訪問校・訪問先

Victoria University of Wellington

訪問先を選んだ動機

夏休みに見学できる場所は少なく、中国香港、オーストラリアとニュージーランドだけであった。インターネットで調べたところ、ニュージーランドは英語圏での日本語教師アシスタント派遣国として常に人気ベスト3にランクインである。そのため、同じ島国であるニュージーランドに行くことにした。

訪問期間

2010年9月12日～2010年9月27日

住居・宿泊先

ホテル：Novotel（学校まで徒歩20分）

2. 訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

Japanese Programme, School of Languages and Cultures

規模（学生数など）

2009年のデータによる、約22270人（内、約17350人はフルタイムの学生）

立地（周辺の様子）

Victoria University of Wellingtonに4つのキャンパスがある。Kelburn キャンパス、Karor キャンパス、Te Aro キャンパスと Pipitea キャンパス。メインとなる Kelburn キャンパスは市内中心部外側

の小山丘にあって、そこからウェリントン中心部の景色を見下ろすことができる。学校までは主な交通機関がバスであるが、ケーブルカーも利用できる。Kelburn キャンパスの近くにスーパーやレストランが少ないため、食事と買い物をするには、やや遠いところに行く必要がある。

学部構成

建築・デザイン学部、経営・商学部、教育学部、工学部、人文・社会科学学部、法学部、理学部、7つの学部からなる。

学事暦（授業期間／休暇期間）

一学期は2月28日から、二学期は7月11日から、三学期は11月15日から始まる。休みはや

や複雑で、以下の表をご覧ください。(2011 学年のデータ)

期間	
4月16日～5月1日	Mid-Trimester Break
6月30日～7月10日	Mid-Year Break
7月16日～7月31日	School holidays
8月20日～9月4日	Mid-Trimester Break
10月8日～10月24日	Study Break
12月20日～1月8日	Christmas break

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

110年以上の歴史を誇る国立大学で、学生数約10%以上が海外からの留学生と国際色が豊かなのが特徴である。ニュージーランドの首都であることから政府機関も多いため、国際関連の分野に強い他、観光立国らしく、旅行学やニュージーランド学などが充実している。海洋保護学などリサーチ系にも強いのも特徴である。また、法学部は国内最高レベルの水準であり、理学部は世界的にも高い評価を受けている研究センターがある。国内唯一の犯罪学、建築デザイン学部も有名である。

日本語教育開始年月日

1989年

日本語学習者数

約200人

一クラスの学生数

10人～30人

主な開講科目について (科目名・学年・時間数等)

- JAPA 112 Elementary Japanese

Lecture : 月曜日 100分 水曜日 100分

担当 : Andrew J. Barke 先生、浦野千春先生

学生数 : 30人前後

Tutorial : 木曜日 100分

担当 : 赤嶺玲子先生

学生数 : 15人前後

レベル：0 から半年日本語を勉強した学生

- **JAPA116 Japanese Language 1B**

Lecture：水曜日 100 分

担当：折山香弥先生

学生数：15 人前後

Tutorial：火曜日 50 分

担当：赤嶺玲子先生

学生数：15 人前後

レベル：高校から日本語を勉強し始め、大学に入って半年勉強した学生
および、大学で0 から 1 年半日本語を勉強した学生

- **JAPA203 Japanese Language 2B**

Lecture：月曜日 100 分

担当：サンドーム光恵先生

学生数：15 人前後

Tutorial：金曜日 50 分

担当：赤嶺玲子先生

学生数：10 人前後

レベル：高校から日本語を勉強し始め、大学に入って 1 年半勉強した学生
および、大学で0 から 2 年半日本語を勉強した学生

- **JAPA302 Japanese Language 3B**

Lecture：火曜日 100 分、木曜日 100 分

担当：伊藤雄志先生、サンドーム光恵先生

学生数：25 人前後

Tutorial：月曜日 50 分

担当：赤嶺玲子先生

学生数：10 人前後

レベル：高校から日本語を勉強し始め、大学に入って 2 年半勉強した学生

および、大学で0から3年半日本語を勉強した学生

- **JAPA311 Japanese Cultures 3B**

講義：木曜日 50分

担当：伊藤雄志先生

学生数：15人前後

レベル：同 JAPA302 Japanese Language 3B であるが、日本人の留学生もいる。

日本語担当教員数

専任（日本人：2名,ニュージーランドン：2名）

非常勤（日本人：6名）

使用教材

初級レベル、『げんき』I、II

中級レベル、『中級の日本語』、『文化中級日本語』

日本文化、Course materia（自編）

臨地実習に行くのが望ましい時期

学事暦によると、3月上旬と9月の中旬ごろが望ましい。

3. 宿泊先について

住居の形態

Novotel はとてもいいホテルである。一人部屋にシャワー、トイレ、電気ポット、インターネット回線（別料金）、ミニ冷蔵庫、ドリンクバーなどつき、とても便利である。ホテル一階のホールに、パソコンが2台あって、無料でインターネットを使える。しかし、市中心にあるので、一泊10500円前後で、周りの食事料金も高い。先輩の話によると、**Victoria University of Wellington** の事務を通して、2食付き一泊6000円前後の宿泊先を紹介してもらうことも可能であるが、宿泊費を立て替える必要がある。

学校までの行き方

歩いていけば、20分ぐらいかかる。学校まで、小山丘を登らなければならないため、運動不足な人にとって、少々きついかもしれない。

周辺の環境

大学に食堂、スーパー、喫茶店がある。ホテルは市中心にあるので、スーパー、コンビニにヤレ

ストランなど、どこへ行ってもとても便利である。

4. 施設見学に関して

4. 1 内容

大学の教室内にすべてパソコンとプロジェクターが付いている。授業を行う時、或いは学生が発表する時、自分でパソコンなど設置しなくても、すぐ使える。教室外の廊下にもいくつかのパソコンを置いてあって、資料を調べるときにとっても便利である。その他、座り心地のいいソファ、地面に敷いているカーペット、学校のあらゆるところに座って、休んでいる学生の姿をよく見かける。とてもマイホームの感じである。しかし、Kelburn キャンパスは 3 つの教室棟から成り立って、広くないが、各教室棟の内部が連絡橋でつながられ、やや複雑である。1 人で歩いていると、よく道に迷ってしまう。


4. 2 学んだこと


マイホーム風のビルから、ニュージーランド人の自由奔放な性格も感じられる。性格的に、アジア人より外向的で、私より先に話しかけてくるが多かったため、彼らと話す時全然堅苦しくなかった。多くの学生は絵をかくことが好きなようで、授業中でも教科書や試験用紙の裏など、いろいろなところに絵を描いている。また、80%の日本語教師は日本人母語話者であるが、授業中の雰囲気もとてもリラックスで、日本とやや違う雰囲気を感じた。

5. 授業見学に関して

5. 1. 1 Victoria University of Wellington の漢字教育

漢字は 4 つの特徴がある：象形、会意、指事、形声。Victoria University の漢字の教え方はそれを利用して、漢字の上に絵をかいて、学生に漢字を連想させる。例えば、「月」という字を説明

する時に、のような絵を書いた（象形）。「美」を説明する時、「美＝羊＋大、大きい羊は美しい」と解釈した（会意）。しかし、一部分の漢字はそうではない。例えば、「期」は形声字で、

左の「其」は音声、右の「月」は意味を表す。それを説明する時、「期＝（現代の時計）＋月（カレンダー）」で、「一定の時から時までの間の意味」と解釈した。（以上の絵は授業中の動画によって、筆者が作成したものです。）

5. 1. 2 学んだこと

前文にすでに述べたように、ニュージーランドの学生は絵を描くことが好きである。その故、漢字教育は漢字の特徴に拘らず、英語圏学生の特徴と合わせて行われている。ほかに、教室に中国人留学生も結構いる。しかし、漢字テストの時、いつも高い点数を取れないそうである。それは、中国人留学生の漢字テストを採点する時、他の学生より厳しいからだそうである。Victoria

University の先生たちは学習者の能力・性格など、具体的な事情に応じて、異なった漢字教育を行って、非常にすばらしい教え方と思う。

5. 2. 1 ドラマの発表

サンドーム光恵先生の紹介で、中級クラスのドラマ発表を見学させてもらった。ドラマ発表の内容は自由で、準備時間は2ヶ月だそうである。学生は2人以上のチームを作り、休みの時間を取って稽古したのである。実際発表するとき、パソコンを使った学生が多くて、特に、**Yoube** の利用率は高かった。発表のテーマは『新人発掘オーディション番組』、『ペンギンと温室効果』、『ニュース番組』、『赤ずきん』、『お見合い』と『生き残り』であった。

5. 2. 2 学んだこと

一番印象に残っているドラマは『ニュース番組』と『生き残り』である。

『ニュース番組』はNHKニュースではなく、ワイドショーのような感じであった。ニュースはすべて「富士山の付近にポケモン発見」のようなオリジナルなもので、さらに事前そとで録画したものを使って、まるでアナウンサーが外で取材している記者と話しているようである。全体的に、内容はユニークで、とても面白かった。

『生き残り』は『ニュース番組』と反対で、全体的な雰囲気が重かった。あらすじは戦争で生き残られた兄と妹2人助け合う話である。演技は言うまでもなく完璧で、一番驚いたのは化粧である。顔や体に「血痕と包帯だらけ」で、知らない人に本当に怪我していると思われるに違いない。シナリオにやや難しい台詞もあるが、発音がとても流暢であった。

それ以外のドラマ発表も面白かった。今回のドラマ発表の授業を通して、学生が日本語だけでなく、発表の中に現れる関西弁、さむらい、ポケモンなど、日本の文化などへの情熱も実感した。実は筆者も留学生授業の時、ドラマを発表したが、主に発音を中心としての練習で、演技や道具など工夫しなかった。どうやって学生の中に潜んでいる日本語への情熱を呼び起こすのか、これからの課題にしたいと思う。

5. 3. 1 Tutorial の授業

今学期の Tutorial 授業はすべて赤嶺玲子先生が担当したのである。赤嶺先生は琉球大学の修士1年生、Victoria University へ1年間の短期滞在である。授業の時間は50分間で、一日何回も同じ授業があつて、学生が好きな時間帯に授業へ行けばいい。Tutorial 授業の内容は小テストや、他の授業に残された練習問題か、応用練習であるが、時間が余ったら、単独な発表や日本の映画を見ることもある。授業時間以外に、赤嶺先生に個別な質問を聞く、あるいは、発音を直してもらう学生もたくさんいる。

5. 3. 2 学んだこと

赤嶺先生は日本語教師になるのが初めてである。彼女と学生との年齢の差を感じなかったのも、

日本語教師より、もっと友達のような存在である。学習者の緊張感や不安感も自然に下がっていき、授業の雰囲気は他の先生より、もっと活発で、若者ならではの魅力を感じた。例えば、本文の内容を PPT に作るとき、その内容だけではなく、内容に応じて、日本若者の間に流行っている絵文字も相応しいところにつけた。それを気づいた学習者も結構いて、それを日本語文化として吸収しやすいと思われる。「若手教師」＋「ベテラン教師」はとてもいいグループで、日本語教育ではなく、他の分野にも行って、学習者の注意を引き付けるのに大いに役に立つと思う。

5. 4. 1 Japanese Cultures

毎週木曜日の午後 6 限に、日本語文化の授業がある。主な内容は学生 1 人の発表＋発表後の質問回答である。発表の内容は「興味を持っている日本人について」で、私が見学した 2 回の授業で紹介された人物は「津田梅子」と「坂本竜馬」である。発表はすべて日本語で、参加者は 3 年生と日本人留学生である。

5. 4. 2 感想

日本人留学生もいることから見れば、この授業に参加する学生の日本語レベルがとても高い。日本人留学生にこの授業に参加する理由を聞くと、「日本の文化にとっても興味を持っているから」と言う答えであった。この授業は日本語学習者と日本人母語話者の交流のいい機会と言えるだろう。予算面が冷遇されている日本語科は日本人留学生を利用して、本学の学生とのコミュニケーションを促進するのも一つの方法なのではないかと思っている。

3. 今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

3. 1 臨地実習の派遣先として

Victoria University of Wellington の学生は主に日本語を副専攻として勉強している。日本語科にとっても人気がある理由は学生が日本のアニメ・漫画文化に対する興味を持っていると考えられる。日本語能力試験 1 級に合格する人が少ない割りに、80%の日本語教師は日本人母語話者なので、自然な日本語を身につけるにはとても役に立つ。そして、今回の見学で、先方の先生に家族のように親切したり、協力したりしていただいて、本当に感謝する。見学なども自由に参加できるうえ、許可をもらえば教室内の写真も取れる。いろいろ勉強になったため、今後の臨地実習の派遣先としてとても相応しいと考えられる。

3. 2 全般的に訪問先として

ウェリントンニュージーランドの首都であるが、東京と違って、より閑静な町である。中心部は比較的に人が多いが、大学の地域に入ると、静かになりつつある。Victoria University of Wellington の学生によると、娯楽施設なども多くないので、勉強にとっても適切な場所だと考えられる。

食事の面について、現地料理に慣れない可能性がある。入国する際に食品に対する検査が厳し

くて、日本の食品をニュージーランドに持ち込むことができないので、ある意味で大変かもしれない。

また、今回の訪問期間は、温度が低くないが、ウェリントンの風がとても強いので、薄い上着だけで足りないと思う。

3. 3 本学学生の訪問先への貢献

初級レベルの授業に、先生はたくさんの英語を使っているのに、一定の英語力がないと、分からないところが多いし、学生とのコミュニケーションもできない。そのほか、私が日本語母語話者ではないが、中級クラスにいた時、よく声をかけられることから、**Victoria University of Wellington** の学生は日本語の勉強に対して熱心で、同年齢層の日本語話者と交流する意欲がとても高い。そのゆえ、本学学生の訪問は学習動機に対して、よい影響を与えると思う。

3. 4 今後の課題・提案

訪問先を決めた時から、ニュージーランドへ行くまで、ちょうど**5**週間の時間がある。それは入国ビザの申請周期と同じなので、担当先生との連絡が足りなかった。ビザが時間通りにおりるかどうかということもあり、入国ビザを申請しながら、実習の準備をすればよかったと思っている。そして、英語力の不足で、今回の訪問は事前計画の「英語圏の初級日本語教育」との目的とずれて、反省する必要がある。しかし、日本語の授業を見学することができて、大変役に立ったので、将来、教師になる人にとって、とてもいい経験になると思う。そして、**Victoria University of Wellington** の留学生の数も少なくないので、ニュージーランド人学生だけではなく、他国の学生の意見もいろいろ聞くことができる。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期過程
言語応用専攻日本語教育学専修コース

5110009

水野綾乃

<訪問先の情報>

1. 訪問に関する一般情報

訪問地（国・都市）

イタリア・ヴェネツィア

訪問校・訪問先

カ・フォスカリ ヴェネツィア大学

訪問先を選んだ動機

イタリアの大学の中でも、高い教育水準を誇るヴェネツィア大学において実施される日本語クラスに強い関心を抱いたため。

訪問期間

2011年2月28日～3月14日

住居・宿泊先

2011年2月28日～3月6日 ホテル イルメルカンテ ディ ヴェネツィア
3月6日～3月14日 ホテル ユニヴェルソ&ノルド

2. 訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

カ・フォスカリ ヴェネツィア大学 外国語・外国語文学部 日本語学科

規模（学生数など）

全体で約18500人

立地（周辺の様子）

ヴェネツィア大学はキャンパスが一箇所に固まっておらず、ヴェネツィアの島内に点在している。しかし、日本語学科が利用する教室のあるキャンパスは島の西部にまとまっており、ホテルの多いローマ広場やサンタ・ルチア駅周辺からも徒歩約20分と、悪くない立地である。

日本語学科の授業があるキャンパスの周囲は、主要な観光名所からは距離があるために落ち着いており、静かである。また、学生の話によれば、ヴェネツィアはイタリアの中ではとても治安のよい町であるという。実際、多くの人が集まる場所やカーニヴァルの時期は、警官がパトロールしている姿をよく見かけた。

学部構成

経済学部、外国語・外国文学部、人文学部、数学・物理・自然科学部

学事暦（授業期間／休暇期間）

前期は9月～1月、後期は2月～5月である。

長期休暇は年末年始の約2週間（今年度は12月23日～1月9日）と、6月～8月である。

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

ヴェネツィア大学はイタリアで最初に経済・商業に関する学部を開設した長い歴史を持つ大学である。また、伝統的に東アジア研究が盛んであり、特に日本研究においてはイタリア屈指の研究・教育水準を持っているとされている。日本語学科に関しては、日本語の授業時間数が他の大学に比べて多く、一年生は週に10時間以上日本語の授業があるとのことだった。また、日本語だけでなく、日本の文学や文化、宗教などに関する授業もあり、多角的に日本について勉強することができる。

日本語教育開始年月日

不明。外国語学部が設置されたのは1954年。

日本語学習者数

約700人。

一クラスの学生数

クラスによって異なるが、大体80～150人。

主な開講科目について（科目名・学年・時間数等）

1年生：文法、文法演習、会話、漢字

2年生：文法、文法演習、会話、古典日本語

3年生：読解、演習

M1：読解、日本語学及び日本語言語学、作文演習

日本語担当教員数

専任（日本人： 0 名、日本人以外：国籍 イタリア 5 名）

非常勤（日本人： 7 名、日本人以外：国籍 イタリア 1 名）

使用教材

新文化初級日本語、文化中級日本語、及びそれらを元にした自作教材

クラスの様子

一クラスあたりの人数が多く、授業に集中している学生から、後ろのほうに座っておしゃべりをしている学生までいて様々である。同学年であっても学生のレベルにはかなりの差が存在する。レベルの高い学生であれば、2年生の前期を終えた段階で日常会話は問題なく行える。しかし、大方の学生はそこまで至っていない印象を受けた。3年生は普段のやり取りもかなり流暢であった。

付属言語教育機関について（訪問国の言語を教えるコースの有無・授業料・授業編成等）

有。授業料・授業編成等は不明だが、エラスムス・コースという短期の集中コースから、より長期に及ぶものまで幅広く展開している。

臨地実習に行くのが望ましい時期

本学が春季休暇に入った時期が、臨地実習を行う上で望ましい時期だと考える。9月の初めと1月の終わりから2月の初めにかけては学期が始まった直後にあたるため、避けたほうが円滑な実習につながるのではないかと。また、3年生の多くは4月から日本へ留学する。その準備のために、4月が近づくと授業に参加する3年生は少なくなるとの話を耳にした。したがって、3月の後半は3年生の様子を知る上では望ましくないといえる。

さらに可能ならば、国際シンポジウムが実習期間と重ならないほうがよい。今回の実習では、日本語のクラスが多い月曜日と火曜日に日本に関する国際シンポジウムが開かれ、そのために多くの授業が休講になった。事前に情報を入手できたなら、国際シンポジウムのない時期を臨地実習期間に設定できるとよい。

3. 宿泊先について

住居の形態

今回の実習ではホテルに宿泊したが、予約の都合から実習中にホテルを移ることになった。適切な手配のおかげでホテル間の移動距離は少なく済んだが、このような事態を避けるためにも早い段階で宿泊先を確保しておくことを勧める。また、2月の末から3月の頭にかけてはカーニヴァルの時期にあたり、ホテルの予約が非常にとりにくい状態になるため注意が必要である。

学生寮も存在するが、教授に宿泊先を相談したところ、今回の候補には挙がらなかった。

宿泊費用であるが、最初に滞在したホテルでは、カーニヴァル中のために一泊約13000円が要求された。次のホテルはこれより4~5000円程度安かったため、実習期間全体で計算すると一泊10000円程度であった。

宿泊した2つのホテルはいずれも三つ星ホテルであったため、必要最小限の設備は整っていた。

学校までの行き方

ヴェネツィアは橋が多く、島内での移動手段は徒歩か水上バスである。ホテルからキャンパスまでは徒歩約20分だったため、実習生は歩いて通学した。

周辺の環境

ホテルはヴェネツィア唯一の鉄道の駅、サンタ・ルチア駅から歩いて数分の立地で、周辺は夜遅くになっても明るく、ある程度人通りもある。また、周りに飲食店が多く、食事をする場所を探すのに苦労しない。

4. その他、補足事項

宿泊先をホテルにするのであれば、ローマ広場かサンタ・ルチア駅周辺のホテルがいいように思われる。大学に近く、周辺にも店が多くあって便利だからである。ヴェネツィアは橋が多く、道路は石畳のため、スーツケースでの移動が最小限に済む場所のホテルを選んだほうが良い、という理由もある。

〈その他研究、実習の成果〉

1. 施設見学に関して

1. 1 内容

通学初日の3月1日に、ヴェネツィア大学の本館ともいえるカ・フォスカリと、日本語学科の先生方のオフィスがあるカ・ヴェンドラミン、そして日本語学科の授業が行われるサンタ・マルタを案内していただいた。翌日は、日本語学科が利用するもう一つのキャンパスであるサン・バジリオにも足を運んだ。

また3月7日には、国際シンポジウムの会場であったカ・ドルフィン、シンポジウムにあわせて催された一人芝居「松井須磨子」の舞台となったアウディトリウムも見学した。

4. 2 学んだこと

いずれの建物も、ヴェネツィアの歴史ある町並みに見事に調和していた。特にヴェネツィア大学の本部であるカ・フォスカリは6世紀以上前に建造された由緒のある建物であり、町の観光地図に掲載されてもいる。カ・ドルフィンやアウディトリウムは内部も豪華であった。教室として使われているサンタ・マルタやサン・バジリオは、その古めかしい外観とは裏腹に、中の教室は新しく設備も充実していた。サン・バジリオは各教室にコンピュータが常備されており、それを用いて授業することがごく普通であった。このサン・バジリオキャンパスの見学を通じて、大人数を相手にして授業を行う上で、コンピュータを利用するというのは非常に有効な手段であるということを学んだ。

第一に、コンピュータを使うことで学生の集中力を切らさない授業を展開することができる。クラスの人数が多いと、教師が黙考したり、次の準備に少し手間取ったりして学生にとって何もすることのない時間が生まれることで、私語が目立つようになり、教室が間延びした雰囲気になりやすいということを今回の実習で感じた。これを避けるためには、入念な準備と共に、テンポよく授業を行う工夫が求められる。例えば文法の授業では、パワーポイントに学習する文法の説明や例文をまとめ、順序よくそれらを提示したり、文型の作り方をアニメーションで説明したりするなど、コンピュータを使える環境をうまく利用して学生の集中力を維持していた。

第二に、コンピュータは教師の板書を多くの学生にとって見やすいものにすることができる。多くの学生を収容することのできる広い教室では、教師や黒板から遠い位置に座らなければならない学生も出てくる。この際、コンピュータを用いれば、文字のサイズを即座に自由に調整することができる。また、複数スクリーンがあればそれを利用することで、教室の後ろに座っている

学生も、前に座っている学生と同じように教師の板書を見ることができるようになる。

個別の事例を挙げれば、漢字の授業におけるコンピュータ使用も非常に効果があるといえる。先に述べたように、大きな文字サイズで漢字を見ることができるだけでなく、アニメーションを用いることで漢字を書く際の運筆の方向までも示すことができるからである。紙に書かれた静止した状態では、例え矢印によって指示されていたとしても、その漢字をどう書いていけばいいかということはイメージが掴みにくいものであったりする。アニメーションという「動き」で漢字の書き方を示すことで、学生はより漢字を書くことに習熟できると考えられる。これは、もちろん教師が自ら手書きをすることによっても同様の教授効果を期待することができるが、コンピュータを用いた場合、教師が手書きする際と比べて、黒板の空きスペースを気にすることなく何度も繰り返し学生に提示することができる、後方の学生にも前方の学生と同じ学習環境を提供できるといった利点が新たに加わる。

施設見学からもう一点学んだこととしては、施設案内の重要性が挙げられる。ヴェネツィア大学の建物は歴史ある趣で、町並みとよく調和している。これは言い方を変えれば、どの建物も外観からはそれが大学のキャンパスであるとはわからないということである。ヴェネツィア大学という文字やプレートが外部にうち出されている建物もあるが、ない建物もある。これには、ヴェネツィアが歴史的な町並みの保存や、町全体の統一感が求められるイタリアの観光地であるということが関係しているのかもしれないが、非常に見つけにくい。また、建物内のどこに何という教室があるかといった案内もあまり充実していない。今回の実習における施設見学では、通りに面した部分や、建物の入り口付近に施設の案内を掲示することの意味を改めて感じる事ができた。

2. 授業見学に関して

2.1 内容

見学した日本語学科2年生の会話の授業（3月2日10:30～12:00）について報告する。学習項目は「謙譲語」で、前回の授業で尊敬語に続いて簡単に「謙譲語」について言及したとのことであった。

①実習生の紹介と尊敬語の練習：実習生をクラスに紹介する。その後、学んだ尊敬語を使って実習生に質問をする。

②聞く練習：4つの会話を聞き、誰と誰との会話なのかを選択肢から選ぶ。前回の内容の復習で、尊敬語を使用しているか否かによって、会話している人物間の関係を推測するというものであった。

③「謙譲語」の説明：広義の謙譲語の用法「自分を低めることによって誰かを高める」を確認した後、「謙譲語」には狭義の謙譲語と丁寧語の2種類があることと、それぞれの用法を説明する。

④謙譲語か丁重語か：OHPで6つの場面とそこにおける「謙譲語」使用を見せ、使われている「謙譲語」が狭義の謙譲語なのか、丁重語なのかを考えさせる。

⑤「謙譲語」の作り方の確認：前回以前の授業で配布されていたプリントを用いて、「謙譲語」の形の作り方を確認する。

⑥文型練習：フラッシュカードを用いて、動詞を「謙譲語」の形式にする練習を行う。その後、教科書の「謙譲語」のチェックリスト（です・ます体の文を「謙譲語」にする問題）を宿題にする。

⑦伝言ゲーム：次にする練習の導入も兼ねて、伝言ゲームを行う。

⑧伝言に関する練習：伝言をする際に用いる表現を学生に出させた後、聞く練習を行う。練習は、電話口での会話で伝言を依頼している会話を4つ聞き、設けられた選択肢のうちどちらが聞いた内容にあっているかを選ぶという問題であった。教科書で次の練習であるロールプレイ「伝言」は、時間の都合から今回は触れるにとどめ、次回の授業で行うことになる。

2. 2 学んだこと

どのように学生の関心を授業に引きつけるかということと、いかに学習項目を焦点化し学生の記憶に残るものにするかという2つを工夫する重要性を学んだ。

この2点は、ある意味ではとても近いといえる。学生が授業に集中していればいるほど授業の内容はよく頭に入るであろうし、逆に、授業にあまり向いていなかった学生の意識を授業に戻すような工夫は、それだけ印象に残るものだからである。例えば、見学した上記の授業において、教師は広義の「謙譲語」から狭義の謙譲語と丁重語の違いに話を進める際、広義の「謙譲語」は自分を低める、つまりは「誰か」を高めるためのものである、として、狭義の謙譲語と丁重語の違いは「誰か」の部分にあると説明した。このことにより、学生は狭義の謙譲語と丁重語で異なる部分がどこかを明確に意識できるようになった。また、「誰か」という疑問詞を用い、学生にも「誰か」の内容を考えられることによって、学生を授業に引きつけると共に、学習項目を記憶に定着しやすい形で提示している。また、⑦伝言ゲームは、身体を動かす活動を行って練習項目である「伝言」を印象付けると共に、遊び的な要素を授業に取り入れて学生が一息つく機会を設けることで、その後の学習において学生が改めて集中を維持できるよう工夫されていた。

3. 教壇実習に関して

3. 1 内容

実習生は今回教壇実習を行わなかった。ここでは、リチェビメント（教員による個別相談）の時間に、授業時間外でも日本語を使う練習がしたいという学生と日本語の会話練習を行った際の様子を報告する。

3月2日（火） 会話練習（学生6人）

お互いに名乗った後、「何でも質問してください」と学生に促す。学生からの質問に答えていると、他の学生との面談を終えた先生が合流し、趣味・出身・将来の夢について改めてそれぞれ自己紹介をすることになる。学生が自分のことを話すごとに、その内容に関する質問を適宜行う。

4. 2 学んだこと

積極的に発言する学生が多かったため、質問を促すという方法でよかったが、ここで何も質問が出ない場合の会話練習の方法も考えておく必要があると感じた。少なからぬ学生との会話練習では、一対一のやり取りが長くならないよう、またどの学生もできるだけ均等に話せるよう留意しなければならないことを学んだ。

4. 今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

4. 1 臨地実習の派遣先として

ヴェネツィア大学は、以下の2点から臨地実習の派遣先として極めて適当であると考えられる。まず、高い教育水準を有している点である。もちろん、日本語学科もこの例外ではない。次に、開校されている日本語クラスの豊富さが挙げられる。日本人教員による授業も見て、会話の他に漢字や演習といった内容のものがあり、このような様々な日本語クラスを目にすることができる。

4. 2 全般的に訪問先として

ヴェネツィアはイタリアの中でも治安がいいとされる。また、観光地であるため、多くのところで英語が通じる。水上バスは値段が高いため、実質の交通手段は徒歩に頼るしかない点を除けば、訪問先として適していると考えられる。

4. 3 本学学生の訪問先への貢献

実習生というイレギュラーな存在が授業に参加し、発言することで、学生の興味・関心を授業に強く引きつけることができたと考えられる。また、最近の日本事情や日本の若者に関する情報を提供することができた。加えて、リチェビメントの会話練習に参加した一部の学生からは、もっと日本語の会話が上手になりたい、ということばをもらった。このことから、実習生は一部の学生の日本語学習の更なる動機付けとしても貢献することができたのではないかと思う。

5. 4 今後の課題・提案

今回の実習では、事前のやり取りの不足と国際シンポジウムや教員の休職などによって時間割が大きく変更になっていたことから、実習生が教壇に立つ機会がなかった。次回からはぜひ教授

との連絡を密に取り、事前にシンポジウムなどの大学の予定や日本語クラスの時間割を把握した上で、教壇実習を行ってほしい。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期課程
言語応用専攻日本語教育学専修コース

5110011

溝口さやか

<訪問先の情報>

1. 訪問に関する一般情報

訪問地（国・都市）

スロヴェニア・リュブリャーナ

訪問校・訪問先

リュブリャーナ大学

訪問先を選んだ動機

これまで実習や見学を行ったところでは漢字圏出身学習者が多く、非漢字圏の学習者の日本語教育現場に興味があったため。

訪問期間

2011 年 2 月 28 日～ 3 月 11 日

住居・宿泊先

Hotel Park

2. 訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

リュブリャーナ大学文学部アジア・アフリカ研究科

規模（学生数など）

学生数：約 63,000 人

教師数：約 4000 人

立地（周辺の様子）

リュブリャーナ大学文学部はリュブリャーナ市内中央に位置している。そのため交通機関へのアクセスも容易である。徒歩圏内にレストランやスーパー等も多くあり、非常に便利である。

学部構成

以下 23 の学部から成る。

- バイオテクノロジー(Biotehniška fakulteta)
- 経済学(Ekonomska fakulteta)
- 建築学(Fakulteta za arhitekturo)
- 社会科学(Fakulteta za družbene vede)
- 電気工学(Fakulteta za elektrotehniko)
- 薬学(Fakulteta za farmacijo)
- 土木工学、測地学(Fakulteta za gradbeništvo in geodezijo)
- 化学、化学工学(Fakuleta za kemijo in kemijsko tehnologijo)
- 数学、物理学(Fakulteta za matematiko in fiziko)
- 海事学、交通学(Fakulteta za pomorstvo in promet)
- コンピューター科学、情報学(Fakulteta za računalništvo in informatiko)

- 社会福祉学(Fakulteta za socialno delo)
- 機械工学(Fakulteta za strojništvo)
- 体育学(Fakulteta za šport)
- 行政学(Fakulteta za upravo)
- 芸術学(Filozofska fakulteta)
- 医学(Medicinska fakulteta)
- 自然科学(Naravoslovno-tehniška fakulteta)
- 教育学(Pedagoška fakulteta)
- 法学(Pravna fakulteta)
- 神学(Teološka fakulteta)
- 獣医学(Veterinarska fakulteta)
- 医療(Visoka šola za zdravstvo)

学事暦（授業期間／休暇期間）

冬学期 10月初旬～1月中旬

冬休み 1月中旬～2月中旬

冬季試験期間 1月中旬～2月初旬

春学期 2月中旬～5月下旬

夏季試験期間 6月初旬～6月下旬

夏休み 7月初旬～8月下旬

秋季試験期間 8月下旬～9月中旬

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

リュブリャーナ大学は1919年に設立され、スロベニアで最も歴史の長い大学である。23の学部と3つの専門学校を擁しており、それぞれの建物はリュブリャーナ市内・周辺に散在している。文学部は1919/20年に発足した。

2009/10年度からボローニャ制度が導入され、学生はダブル・メジャー以外に、シングル・メジャーを選択できるようになった。

日本語教育開始年月日

日本研究講座は、1995/96年に文学部に設置された。アジア・アフリカ学科の日本研究講座として設置され、中国研究講座も同時に始まった。

日本研究講座は1980年代からの一般人対象の日本語講座を発展的に吸収したものの。

日本語学習者数

日本研究

1年生	シングルメジャー	50人	ダブルメジャー	29人
2年生	シングルメジャー	18人	ダブルメジャー	11人

東アジア研究・日本研究専攻

3年生	12人
4年生	13人

東アジア文化（ダブルメジャーのみ）

1年生	33人（うち15人、必須外国語として日本語を選択） + 9人（他の専攻の人で、KVA日本語1に通っている学生）
2年生	7人（うち4人、必須外国語として日本語を選択） + 1人（他の専攻の人で、KVA日本語1に通っている学生）

一般公開日本語夜間講座

1年生	8人（高校生／社会人）
-----	-------------

一クラスの学生数

1年生：20人前後

2年生以上：10人～15人程度

主な開講科目について（科目名・学年・時間数等）

- 1年次：現代日本語1…週10コマ（45分×10回）、日本語文法講義（スロベニア語による）…週2コマ、日本語表記…週2コマ等
- 2年次：現代日本語2…週6コマ、日本語文法講義（スロベニア語による）…週2コマ等
- 3年次：現代日本語3…週4コマ、古典入門等
- 4年次：翻訳通訳週2コマ等

日本語担当教員数

専任（日本人：3名、日本人以外：国籍 韓国・スロベニア 4名）

使用教材

- 初級 "SODOBNI JAPONSKI JEZIK" I: PRVI KORAKI（『現代日本語 I 上』）
"SODOBNI JAPONSKI JEZIK" II: OSNOVE（『現代日本語 I 下』）
（リュブリャナ大学文学部出版）
- 中級 『文化中級日本語 I』文化外国語専門学校（文化外国語専門学校）ほか
- 上級 『文化中級日本語 II』文化外国語専門学校（文化外国語専門学校）ほか

クラスの様子

筆者が多く見学した1年次のクラスの学習者のレベルは、大学から0初級開始の学生がほとんどであったが、留年生の有無により初級前半と後半の学生が入り混じっている感を受けた。また、2年生は中級が多いように思ったが、日本留学経験のある学生もおり、そのような学生は上級レベルであった。

クラスの様子としては、学生は全体的にシャイで、我先にと発言するタイプの学生よりも黙々と真面目に勉強するタイプの学生が多いように感じた。1年生・2年生の授業は、日本語の授業は演習の前に媒介語であるスロベニア語によって文法説明がなされ、その後、日本人教師による日本語の演習授業が開かれていた。

付属言語教育機関について（訪問国の言語を教えるコースの有無・授業料・授業編成等）

有：半期（毎日コース）1300ユーロ、（週2日コース）580ユーロ

臨地実習に行くのが望ましい時期

2月中旬から春学期が始まるため、この時期が良いと思うが、日本の他大学から教育実習生が2月上旬に来ているとのことなので、そちらの実習生と期間を合わせるとより実習の可能性が広がると思われる。

3. 宿泊先について

住居の形態

Hotel Park:

Tabor 9 1000 Ljubljana Slovenia

1泊70€（朝食付き）

テレビ、電話、シャワー、ドライヤー付き。インターネットはロビーにて使用可能。無料Wi-Fiが使える他、設置されているパソコンも30分間は無料で使用可能（ただしロビーでインターネットIDを毎回貰う必要有）。

学校までの行き方

徒歩で約25分。

周辺の環境

基本的にリュブリャーナの中心地全体に徒歩でアクセス可能。リュブリャーナの駅までは徒歩10分ほどである。スーパー、商店、レストラン、喫茶店などもホテル周辺にある。

4. その他、補足事項

空港からリュブリャーナ市内へのアクセスは、「Airport Transfer (<http://www.prevozi-markun.com/en/>)」を使用することをお勧めする。インターネットで事前に予約しておけば、宿泊先のホテルまで送迎してくれる。

〈その他研究、実習の成果〉

1. 施設見学に関して

1. 1 内容

リュブリャーナ大学文学部内の施設の見学を行った。文学部内には教室のほか、カフェテリア、パソコンコーナー等があり、それぞれの教室には PC (Windows、インターネット接続あり) とプロジェクター、ビデオデッキ、テレビ、OHP プロジェクターがあった。そのため、USB に入れているデータを学生に見せたり、授業中にインターネットで検索した情報を見せたりすることも可能であった。

また文学部構内には中国・日本研究の学生のための図書室、先生方の研究室等がある別棟があった。先生方の研究室は2~3人で一部屋を使う形態で、パソコン・プリンター・コピー機が設置されていた。

5. 2 学んだこと

リュブリャーナ大学では各教室にインターネット接続が出来るパソコンやプロジェクターが完備されていたため、先生方もそれらを上手く活用しているようであった。特に印象的であったのは、教科書内に簡単な読解として出てきた、ちょっとした日本文化 (アニメ) をインターネットを活用して紹介していたことである。教科書は『みんなの日本語』に準拠しているため、内容的に日本国内に住んでいないと知らないような日本文化の一コマが含まれていたのだが、その問題を行う際に先生がすぐさまインターネットを活用して実物の写真や絵を提示していた。

このようにすることで、学生も視覚的に内容理解が促進されるだろうし、また授業にもメリハリを付けることができるのではないかと思う。

2. 授業見学に関して

2. 1 内容

見学した授業は以下の通りである。

1 年次授業 :

- ・現代日本語 1 演習 (学習者人数 : 10~25 人)
- ・現代日本語 1 表記 (学習者人数 : 約 40 人)
- ・現代日本語 1LL (学習者人数 : 約 30 人)

2 年次授業 :

- ・現代日本語 2 演習・講義 (学習者人数 : 約 15 人)

3 年次授業

- ・現代日本語 3 (学習者人数：約 10 人)

2~4 年次選択授業

- ・書道 (学習者人数：約 15 人)

一般公開講座 (学習者人数：8 人)

基本的に現代日本語の授業の講義では媒介語のスロベニア語を用いて文法解説がなされ、その後演習で日本語のみを用いたドリルがなされていた。演習は、火曜日から金曜日が教科書に沿った各課の練習で、月曜日のみ、前の週の復習兼確認テストが行われていた。また、表記の授業とは漢字の授業のことで、1 回当たりの授業で 16~20 字が導入され、次の回で小テストを行うという形態であった。

2. 2 学んだこと

媒介語使用と直接法の住み分けと、それぞれが持つ役割について今回の見学では多く考えさせられた。というのも、これまでの実習で見てきたところでは、直接法で文法の導入から全て行うところが多く、私自身の中で日本語教育=直接法という固定観念が出来ていたからである。

しかし、今回の見学で、文法解説は媒介語を使用し演習では直接法、という住み分けを前にして、これまでに私の中に出来ていた固定観念の存在への気付きとなると共に、媒介語によってやはり学習者の理解は促進されるのだということを再確認することが出来たように思う。

3. 教壇実習に関して

3. 1 内容

3 月 10 日 (木) 10:30-12:05

【授業の目的】

- ・アドバイス・忠告ができるようになる。
- ・事柄について推量が述べられるようになる。

【準備】

絵カード、レアリア

【授業手順】

時間	活動の目的	授業の流れ	板書・必要なもの
----	-------	-------	----------

<p>3分</p>	<p>「したほうがいいです」 学習項目明確化</p>	<p>・T:「日本のともだちにスロベニアのプレゼントをみたいです。スロベニアのプレゼントは何がいいですか。」 →S全体が答える。 → 「A:プレゼントをみたいです。何がいいですか。」 B:<u>フルーツティーを買ったほうがいいです。</u></p> <p>・練習A1 T範読(一文のみ)→SC Sを指名→SC ※読み方が甘かったらT範読を入れる ⇒negative形確認</p>	<p>板書(「買います」が元の動詞であることも板書)</p> <p>板書: 買わない方がいいですよ。</p>
<p>10分</p>	<p>「したほうがいいです・しないほうがいいです」作る練習</p>	<p>マス形からの変形練習(negativeも同時に聞く) ※白板横に立つ。 ・易しい語彙でまずV5・V1・変格 ※白板にすでに書かれた例文を指してマス形・positive方がいいです・negative方がいいです を1つずつ言わせる。 ⇒難しめの語彙も含め混合で学生を指名し、マス形・posi/nega方がいいです。(指名は端から順に) ※語彙が学生から出てこない場合は切り替えてマス形の確認をまず行う。 ※活用の出来が悪いものは、コーラスで確認</p>	<p>絵カード(A4)</p>
<p>15分</p>	<p>「した・しないほうがいいです」でアドバイスを言う練習</p>	<p>・練習B-2 全体で確認 ・悩み(カード)に対してSアドバイスを言わせる。 →まずTがカードを引き、アドバイス言う。 「カード:「お金がありません」</p>	<p>白紙</p> <p>カード: 漢字が覚えられません</p>

		<p>たくさん働いたほうがいいです。」</p> <p>→学生個別にカードを引かせ、一人一人に白紙にアドバイスを書かせる。</p> <p>→ペアで互いのカードを交換し、各自考えたアドバイスを発表し合わせる。</p> <p>(例を見せる。: Tと学生一人で。)</p> <p>※個別でアドバイスを書かせることで、個人の理解度確認にもなる。</p> <p>(⇒全体発表</p> <p>※全体で内容確認→評価)</p>	<p>お金がありません</p> <p>いつも寝坊します</p> <p>おいしい中華料理が食べたいです</p> <p>板書消す</p>
3分	「でしょう」明確化	<p>・T:「今日の朝、天気ニュースを見ました。明日は太陽のマークでした。テレビは言いました。明日は晴れる…でしょう。」</p> <p>・練習A2</p> <p>T範読(一文のみ)→SC</p> <p>Sを指名→SC</p> <p>※読み方が甘かったらT範読を入れる</p> <p>⇒動詞 negative 確認</p>	<p>板書:</p> <p>明日は晴れるでしょう。</p> <p>板書: 晴れないでしょう</p>
10分	「でしょう」作る練習	<p>・易しい語彙でまず動詞V5・V1・変格</p> <p>※白板にすでに書かれた例文を指してマス形・positive・negative でしょう</p> <p>を全体で1つずつ言わせる。</p> <p>⇒形容詞・名詞も同様に</p> <p>(形容詞・名詞の活用の仕方に心配が見られたら、板書)</p> <p>⇒難しめの語彙も含め、混合で学生を指名し、マス形・posi/nega 方がいいです。(指名は端から順に)</p> <p>※語彙が出てこないようなら、切り替えてまずマス形を確認</p> <p>※活用の出来が悪いものは、コーラスで確認</p>	絵カード
5分		休憩	
	「でしょう」作文練習	<p>・練習B4</p> <p>※例: T範読→SC</p>	

15分		<p>問題 1：全体で確認</p> <p>問題 2～：質問文に学生一人、答えに学生一人を指名</p> <p>・「今日の運勢」 雑誌の占い紹介</p> <p>例：誕生日が1月の人は 明日赤い服の人に会うでしょう。 黄色のさいふがラッキーアイテムでしょう。</p> <p>学生をグループに分けて、誕生月を指定し、その誕生月の人の運勢を考える（一人最低1つ：5分）。</p> <p>※この間学生を見回り、出てきた質問は全体で共有も。 ⇒発表 ※他の学生に内容確認→発表の学生に評価！</p>	<p>雑誌の占いページ</p> <p>板書： 誕生日が〇月の人は、今日_____でしょう。 今日_____がラッキーアイテムでしょう。古い友達に会う 財布をなくす お金をひろう 手紙が届く</p> <p>板書消す</p>
3分	「かもしれません」明確化	<p>T：「携帯電話を落としました。壊れますか。分かりません。 携帯電話が壊れるかもしれません。」</p> <p>・練習A3 T範読（一文のみ）→SC Sを指名→SC ※読み方が甘かったらT範読を入れる ⇒Negative 板書</p>	<p>板書： けいたい電話が壊れるかもしれません。 板書（「壊れます」が元の動詞であることも板書）</p> <p>板書： 壊れないかもしれません。</p>
10分	「かもしれません」作る練習	<p>・易しい語彙でまず動詞V5・V1・変格 ※白板にすでに書かれた例文を指してマス形・positive・negative でしょう を1つずつ言わせる。 ⇒形容詞・名詞も同様に</p>	絵カード

		<p>(形容詞・名詞の活用の仕方に心配が見られたら、板書)</p> <p>⇒難しめの語彙も含め、混合で学生を指名し、マス形・posi/nega 方がいいです。(指名は端から順に)</p>	
17分	3つの文型で会話文作成練習	<p>・練習 C-3、C-1 :</p> <p>C-3 Sを半分で役に分けて音読 問題1つ全体で確認。</p> <p>C-1 Sを半分に分けて音読 問題1つ全体で確認。</p> <p>※これから問題にアドバイスを考えることを暗示。</p> <p>・AさんBさん相談 :</p> <p>・フォームを板書</p> <p>・例をT読み上げ→ペアで作らせる</p> <p>A: __明日寝坊する__かもしれません。</p> <p>B: そうなんですか。じゃ、__今日9時にねた__ほうがいいです。</p> <p>__明日朝6時に起きられる__でしょう。</p> <p>※T見回り: 学生からの質問は時に共有も。 (作文に困っている学生の助けにもなる。)</p> <p>(⇒発表 ※他の学生に内容確認→評価)</p>	<p>フォーム板書</p> <p>選択肢板書:</p> <p>携帯電話をなくしました</p> <p>明日試合で負けます</p> <p>変なものを食べました</p>

5.2 学んだこと

授業の感想、反省点など

・教師の発話量:

全体的に教師が学生全体に投げかける、という形のインターアクションが多く、学生の発話量確保にあまり繋げることができなかった。このことについては授業後に先生から、教案を考える際には「言葉を使わなくても学生に伝わるか、伝わらないなら最小限でどう言えばいいか」をまず考えるように、とのアドバイスをいただいた。

・各学生の理解度を把握するための工夫:

ペアワークで作文や会話作成をさせるタスクが多かったため、文法の運用がよく理解できていない学生が、よく出来る学生に隠れてしまったように感じた。個人で行う、または発表するタスクを設定する他、よく分かっている学生と分かっていない学生間のインターアクションを上手く利用し、両者の理解が進む方法を考えることが課題である。

・パターン練習の提示順：

実習では、動詞からの変形練習をスムーズに進めることが出来なかった。これは、変形練習用に提示した動詞の語彙を学生に逐一確認する必要と変形させる必要の二つのハードルを与えてしまったためであったと思われる。パターン練習をリズム良く進める為には、語彙を容易なものから難易度を徐々に上げていきなり、難易度の高いものは先に語彙の確認をしておく必要があると、先生からもアドバイスをいただいた。

・T範読→コーラスの量：

次の学習項目に移る際や、教科書中の練習問題に入る際、教師の範読から学生全体にコーラスさせることが多く、単調になっていた感があった。範読をした目的が発音指導だったのか、単なる授業の区切りだったのか、によって、学生を指名して読ませるといった方法もあったと思う。そうすれば、授業全体の教師と学生全体というインターアクションから、より学生中心のインターアクションが作り出せたのではないかと思う。

4. 今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

4. 1 臨地実習の派遣先として

リュブリャーナ大学の先生方も教壇実習を快くさせてくださるし、また実習に際しての教案についても時間を割いて検討や反省を一緒にしてくださるので、実習生としてはとても貴重な経験が出来る場である。また、日本国内ではなかなか経験出来ない、対非漢字圏の学習者の日本語教育現場を見ることが出来るということも、日本で日本語教育を学ぶ実習生にとっては魅力的になるとと思われる。

4. 2 全般的に訪問先として

大学もあるリュブリャーナ市内はほぼ徒歩でも移動でき、交通機関も充実していることや、治安が良いこと、物価もさほど高くないこと、スロベニア語が出来なくとも英語で何とか生活可能なことを考えると、訪問先としてとても理想的ではないかと思う。

4. 3 本学学生の訪問先への貢献

普段学生たちは日本語母語話者と交流する機会が多くないと思われるため、学生と交流する機会を多く持つことが、リュブリャーナ大学側からも求められることであると思われる。

6. 4 今後の課題・提案

授業見学・実習内容は、実際に行ってみるまでに現地の先生方と詳しく設定することはなかなか難しいが、実習生の実習の目的を明確にしておくことが肝要かと思う。現地の先生方は実習にとても協力的で、比較的自由に見学なり実習なりをさせてくださる（くださった）ので、もちろん先生方との相談は必要だが、実習生自身で臨地実習期間のどこでどんなことをするのか、したいのか、を持っていると希望に近い実習ができるだろう。

学生との交流機会の確保は今回私の中で大きな課題となったのだが、リュブリャーナ大の学生もシャイな学生が多いので、実習生自身が率先して食事やお茶に学生を誘うと良いと思う。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期課程
言語応用専攻日本語教育学専修コース

5110005

宮野谷 希

<訪問先の情報>

1. 訪問に関する一般情報

訪問地（国・都市）

シンガポール

訪問校・訪問先

シンガポール国立大学 語学教育研究センター

訪問先を選んだ動機

もともと英語圏における日本語教育に興味を持っていたのだが、その中でもシンガポールはアジアであるため、他の英語圏とはまた違った雰囲気や特色があるのだろうと思い、その様子を拝見したいと思ったため。

また、「シンガポールは教育に最先端の技術を用いている」と聞いたことがあったので、実際にどのような授業が行われているのか確かめたいと思ったため。

訪問期間

2011年2月25日～3月16日

住居・宿泊先

Fragrance Hotel Waterfront

(語学教育センターから徒歩15分ほど)

2. 訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

シンガポール大学 語学教育研究センター

規模 (学生数など)

大学：26418人

大学院：10548人 (2010年11月現在)

立地 (周辺の様子)

大学の敷地は非常に広大で、大学内からは街のいたるところへ出るバスが乗り入れており、最寄りの駅や、ショッピングモールなどに15分ほどで行くことができる。

大学のまわりは閑静な住宅街といった雰囲気だが、語学教育研究センターのある文学部の周辺には食堂やコンビニも何軒かある。夜遅くでも大通りや食堂周辺は学生が行き来しており、治安も悪くない。

学部構成

Arts and Social Sciences (人文社会科学部)

Business (経営学部)
 Computing (コンピューター)
 Dentistry (歯学部)
 Design and Environment (設計・環境)
 Engineering (工学部)
 Law (法学部)
 Medicine (医学部)
 Music (音楽)
 Science (理学部)

シンガポール国立大学には以上の全 10 学部と、3つの大学院がある。今回訪問した語学教育研究センターは、Arts and Social Sciences の中の組織である。

学事暦 (授業機関/休暇期間)

2010/2011 年度の学事歴

オリエンテーション週間	2010年8月2日～8月7日
1 学期授業期間 (1)	2010年8月9日～9月17日
中間休み	2010年9月18日～9月26日
1 学期授業期間 (2)	2010年9月27日～11月12日
Reading Week	2010年11月13日～11月19日
1 学期試験期間	2010年11月20日～12月4日
長期休暇	2010年12月5日～2011年1月9日
2 学期授業期間 (1)	2011年1月10日～2月18日
中間休み	2011年2月19日～2月27日
2 学期授業期間 (2)	2011年2月28日～4月15日
Reading Week	2011年4月16日～4月22日
2 学期試験期間	2011年4月23日～5月7日
長期休暇	2011年5月8日～7月31日

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

シンガポールには、シンガポール国立大学 (NUS)、南洋工科大学 (NTU)、シンガポール経営大学 (SMU) の3つの大学しかなく、その中でも NUS は、シンガポール唯一の総合大学である。シンガポールの教育制度はとて厳しく (小学校4年生の段階で、テストの成績でレベル分けされる)、選ばれた上層の学生のみが入ることができる学校とのことである。その中の一機関である語学教育研究センターでは、日本語を含めた12の言語が、一般教養科目として教えられている。

日本語教育開始年月日

2001年7月1日

日本語学習者数

研修に行った学期の全履修者数は750名であった。

一クラスの学生数

Japanese 1 : 300名

Japanese 2 : 190名

Japanese 3 : 100名

Japanese 4 : 70名

Japanese 5 : 40名

Japanese 6 : 30名

News : 20名

センターの授業は、そのレベルの学生が全員集まり、文法の講義を聞く **Lecture** と呼ばれる授業と、**Lecture** で学んだ文法項目の運用練習をする **Tutorial** と呼ばれる授業に分かれている。**Tutorial** の授業は、各15~20名になるようクラス分けがされている。

主な開講科目について（科目名・学年・時間数等）

Japanese 1

Japanese 2

Japanese 3

Japanese 4

Japanese 5

Japanese 6

新聞読解

語学教育研究センターでは、日本語1から日本語6まで6つのレベルに分かれており、日本語6を終了した学生が受講できる「新聞読解」のクラスも開講されている。Japanese1~6は、**Lecture** が1コマ、**Tutorial** が3コマで、合計週4コマ履修することになっている。

● 1課終了までの流れ

Lecture（2時間）→TutorialA（2時間）→TutorialB（2時間）→TutorialC（1時間）

新聞読解は、1コマ2時間の **Lecture** と **Tutorial** が週に1回ずつである。

また、日本語は一般教養科目の一つで、必修ではないため、どの学年であっても受講できる。

日本語担当教員数

専任（日本人：12名）

非常勤（日本人：9名，日本人以外：国籍シンガポール 2名）

使用教材

Japanese1	『みんなの日本語』（英語版）スリーエーネットワーク
Japanese2	『みんなの日本語』（英語版）スリーエーネットワーク
Japanese3	『みんなの日本語』（英語版）スリーエーネットワーク
Japanese4	『みんなの日本語』（英語版）スリーエーネットワーク
Japanese5	『中級の日本語：改訂版』ジャパントイムズ
Japanese6	『ニューアプローチ中上級日本語完成編』語文研究社 『日本語総まとめ N2 文法』（参考書として）アスク
Newspaper	新聞などの生教材

Japanese1～2 で初級前半、Japanese3～4 で初級後半を扱う。どのレベルでも、パケットと呼ばれる、担当講師が適宜必要と思った教材を取り入れた自作の教材集のような物が全員に配られ、特に初級クラスは、テキストよりもそちらを主に使っているようであった。どの授業もあまりテキストには頼らず、さまざまな生教材が用いられていた。

クラスの様子

全体的に学生はすごくまじめであるという印象であった。大人数の集まる Lecture であっても、みなまじめに授業を聞き、真剣にノートを取っていたし、授業中の発言や質問も積極的であった。

少人数で会話の練習をする Tutorial では、先生方が基本的にコミュニケーション手法を多く取り入れていたこともあり、なるべく日本語をたくさん使おうという雰囲気であった。また、学生たちは Lecture で習った文法項目をよく理解して Tutorial に臨んでおり、授業全体が非常にスムーズに進んでいた印象を受けた。

臨地実習に行くのが望ましい時期

今回はちょうど中間休みが明けると同時に訪問することができたので、最適であるとのことであった。授業期間が始まってしまうと、先生方が忙しくなってしまう、常勤講師の皆様にご挨拶がなかなかできないので、授業期間が始まる少し前に訪問し、皆様にご挨拶をすると、その後の見学の依頼などがスムーズにいったよいと思われる。

しかし今回はちょうど中間テストと重なり、学生も先生方も忙しい時期であったので、もし可能ならば、テストと重ならない時期をあらかじめ相談して訪問すると、たくさん学生と交流がで

きてよいかもしれない。

3. 宿泊先について

住居の形態

ホテル (Fragrance Hotel Waterfront)

ワンルームに、トイレとシャワーが付いていた。

ホテル内に食堂はない。

インターネットがチケット制で、有料 (2時間5ドル)。

149 シンガポールドル/1泊

※今回は学生寮が満室とのことで、ホテルに滞在することになった。

年度によっては学生寮に滞在できる場合もある。

学校までの行き方

センターまで徒歩で15分ほど。

周辺の環境

ホテルを出たところにバス停があり、最寄りの駅やショッピングセンター、観光地へも簡単に行けるので便利である。大学へ行く途中にコンビニや、食堂も何軒かある。夜も人が歩いているので女性が一人で歩いても怖いという印象はなかった。

6. その他、補足事項

〈その他研究、実習の成果〉

1. 施設見学に関して

1.1 内容

シンガポール国立大学は非常に広大な敷地をもち、学部間はバスを使って移動するほど広い。敷地内には緑が多く、落ち着いた雰囲気である。今回は主にセンターのある Arts & Social Science Link (以下 AS Link) を見て回った。AS Link に入っていくと、講義等の外に設置されたテーブルに学生が集まって勉強会を開いていたたり、通路に古着、お菓子などの露店が開いていたりと、自由な雰囲気である。AS Link には講義棟が〜つあり、その他にフードコート形式の大きな食堂や、コーヒーショップ、ATM、書店などがある。普通の教室より少し広めの講義室 (LT) が8室ある。近くに中央図書館や、生協もある。また、バスに乗って少し行ったところに IT CO-OP という、パソコンやその周辺機器がそろった生協などもあった。

中央図書館には英語や中国語の本はもちろん、日本語の本も相当数所蔵されている。学術書だ

けではなく、日本の雑誌や漫画などもあった。館内は非常に広く、学生が勉強できるスペースや、飲食ができるスペースなどがあった。

各学部群にそれぞれ食堂がある。AS Link の食堂には、シンガポール特有の料理を出すお店が数件と、日本料理、ムスリム料理、インドネシア料理、西洋料理、ハンバーガー、生搾りジュースなど多国籍の料理を食べることができる。大体朝 8 時から夜の 8 時まで開いているが、夜は売り切れ次第終了なので、早く閉まってしまうお店も多い。

語学教育研究センターでは、常勤講師はそれぞれオフィスをもっており、パソコン、プリンター、電話などが与えられる。二人一部屋のオフィスと一人一部屋のオフィスがあり、今回の実習では二人一部屋のオフィスを使わせていただいた。非常勤講師のためには非常勤講師室があり、そこで共同でパソコン、プリンターなどを使うことができる。

3. 2 学んだこと

講義棟間を移動する通路に設置されているテーブルにはいつもたくさんの学生がパソコンを開いて勉強しており、NUS の学生はみな勉強熱心であるという印象を受けた。

また、Lecture を行う講義室の設備はたいへん立派で、正面の大スクリーンに、コンピュータ画面や、OHP の画面が映し出せるようになっている。ほかの全小教室にも OHP が設置されていて、中には小教室でもコンピューターが設置されている教室もあり、教師の工夫次第でさまざまなソースを使って授業ができると感じた。NUS では無線 LAN でインターネットも利用できるもので、これも大いに活用できる。

さらに、たった 3 週間の研修生であった私にもパソコンとプリンターを用意してくださったことをみても、NUS の設備がいかに充実しているかがうかがえるだろう。

2. 授業見学に関して

2. 1 内容

各レベルの先生方からいただいた時間割表に基づいて見学のスケジュールを組み、全てのレベルの授業を見学させていただいた。各レベルで Lecture と Tutorial の両方を見学しようとしたが、時間の都合上どちらかしか見学できないレベルもあった。見学後に、指定の用紙にレビューを記入して、担当の先生にお渡しした。

2. 2 学んだこと

Lecture はどのレベルも、パワーポイントの資料を使って授業を進めており、授業中に教科書はほとんど使っていなかった。教科書に書いてあることをそのまま授業で教えたのでは、学生から不満が出るとのことであった。ここにも NUS の学生のまじめさを垣間見ることができる。どの先生方も、パワーポイントの資料に文法説明だけでなく、ターゲットの内容理解を促進させるような画像や、YouTube の動画、詩や短歌、新聞記事など、生教材を効果的に用いており、そのリソースの豊富さに驚かされた。また、大人数の集まる講義であっても、

学生の席にマイクを回して学生と教師とのインタラクションを大事にしている先生も多く、先生方それぞれが信念をもって授業に臨んでいらっしやるということが分かった。

Tutorial は少人数で会話を中心とする教室活動を行う授業であるため、より一層先生方それぞれ独自の進め方を見ることができて非常に有意義であった。中でも印象的だったのが「ジョーダン・メソッド」と呼ばれる手法を取り入れた授業で、教室内では「練習のための会話」ではなく、ターゲットの文法項目を使った臨場感と一体感のある活動が展開されていた。その日は『みんなの日本語』第9課のターゲットの一つである、「誘い、提案」の会話練習であったのだが、はじめに教科書の例文を使って会話練習をした後、後半は実際に「クラスみんなでシンガポールの観光地へ遊びに行く」という設定で、ターゲットの文型や表現を使って実際に学生に行き先や、そこで何をするかなどを決めさせながら、教室全体でひとつの物語を作っていくという活動が展開された。最後にはみんなで記念撮影までするという徹底ぶりに驚いたが、そうして物語の中うまく学生を引き込むことで、学生たちはよりリアルなコミュニケーションが体験できているようであった。

他の先生方の授業もみなコミュニカティブで、ペアワークやロールプレイ、インタビュー活動など、さまざまな活動を取り入れていて勉強になった。新聞読解の授業では、実際に新聞に寄せられた「身上相談」を読んで、自分自身でアドバイスを考えるなど、高いレベルでなければできないような活動もされていた。今回の研修では初級から上級まですべてのレベルの学生を見ることができたため、どのレベルでどのくらいの日本語が話せるようになるのかが分かったし、日本語6を修了した学生は非常に高い運用能力を身に付けることができるということが分かった。

また、これまで直接法中心に日本語教育を学んできたが、媒介語を使った日本語教育現場を見ることができたことも大変有意義であった。シンガポールのようにひとつの共通語がある場合、特に初級では、文法説明などは媒介語を使って説明した方が理解が早い場合もあるということを学んだ。

3. 教壇実習に関して

3.1 内容

今回は日本語4の **Lecture** と **Tutorial** に入れていただき、オノマトペの特別講義をさせていただいた。**Lecture** ではオノマトペの概要を説明する15分の講義を1回、**Tutorial** では、浜崎先生の担当する **TutorialA** の全ての授業（計5回）で15分時間をいただき、オノマトペを使った会話練習をした。以下、**Lecture** で使ったパワーポイント資料、**Tutorial** における教案を載せる。

●Lecture PPT 資料

ちよるちよる めそめそ くしゃくしゃ ちんまり
うじうじ にやー にこにこ
てくてく だらだら ちらちら め どん
さめざめ
ちよ ち
うつ
わ
さばさば こわ もっちり ぴく がらから
きらきら すっかり くるくる じーん ざつ ぴかぴか
ごろごろ とんてんかん

日本語のオノマトペを知ろう

2011. 3. 10
東京外国語大学
宮野谷 希

オノマトペって何？

onomatopoeia

- ◆オノマトペのうた
<http://www.youtube.com/watch?v=3a0GEm1X8>
- ◆ぎおんご (擬音語)
= the fact of words **containing sounds** similar to the noises they describe
ex. パチパチ ガチャン コンコン コクココー
- ◆ぎたいご (擬態語)
= the fact of words that mimics something that **does not make a sound**
ex. イライラ ツヤツヤ イチャイチャ ジーッ



見てみましょう①

Q : 「？」には何が書いてあると思いますか。





見てみましょう②

wer: 集めているものはある？

Tomoko: スワロフスキーのもの。アクセサリ
や帽子、ヘッドフォン、ケータイも
キラキラしています。



♪ Twinkle twinkle little star

How I wonder what you are

きらきら光る お空の星よ



Q & A



◆下の文は正しいですか？

☞ オノマトペはカジュアル(casual)な場面だけで使います。

はい

いいえ



日本経済新聞の一年間の記事に
オノマトペが3200回！！

→新聞でもよく使われます。

8

Q & A



◆なぜオノマトペを使いますか？

答: オノマトペを使うと、

① **頭の中にイメージがしやすい**し、

② **親しみやすい**からです。

↳ 親しむ: become intimate/familiar



・彼女は笑った。⇒ 彼女は**ニコリ**笑った。

・そのネックレス、光ってきれいだね。

⇒ そのネックレス、**きらきら**光ってきれいだね。

9

Q & A



◆どうやって使いますか？

1. ○○(と) + V (副詞adverb) / **stare**

・「なんだろう、あの人、私のことを**じーつ**と見てるよ。」「あなたのことが好き
なんじゃない？」

・「ザッカーバーグさんの言っていることは、難しすぎて**さっぱり**分からな
い。」

全然

2. ○○する (第三グループの動詞)

・「どうしよう！つい**だらだら**してしまって、全然勉強していない！」

3. ナ形容詞

be lazy

・目撃者「たしか、犯人は…青いシャツを着ていました。…いや、黒だった
かな？」

警察「かなり記憶が**あやふや**ですね…」

uncertain

10

☆ おわり ☆

質問がある人は、

いつでもオフィス(AS4:0101)に来て下さい！



11

●TutorialA 教案

目標： Sは + [オノマトペ]シテイテ/Vテ + [評価・コメント]。
 という文が作れるようになる。

授業の流れ・活動	メモ							
<p>●Lecture の復習／構文の導入 「そのネックレス、きらきら光ってきれいですね」 を誘導。 【S は + [オノマトペ]シテイテ/V テ + [イ形容 詞/ナ形容詞]ですね。】 ↑これを板書</p> <p>●メインの活動●</p> <p>白板例</p> <div data-bbox="204 880 737 1095" style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <table style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">グラグラ</td> <td rowspan="3" style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;">絵</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">quake</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">サラサラ</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">ピツタリ</td> <td></td> </tr> </table> <p style="text-align: right; margin-top: 10px;"><u>your comment</u></p> </div> <p>状況の分かる絵と、いくつかのオノマトペ（各3 つくらい）と動詞を提示し、コメントをさせる。</p> <p>流れ：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. どのオノマトペがふさわしいか当てる（一斉） 2. 絵についてのコメント、そしてそれに続く会話を考える（ペア） 3. 考えた会話を発表する <p>※これを2～3パターン（時間の許す限り）繰り返す</p> <p>※最後に「こんなふうにオノマトペを使うと会話が生き生きとするのでオノマトペをいろいろ調べて使ってみてね」という主旨のコメントをして終了。</p>	グラグラ	絵	quake	サラサラ		ピツタリ		<p>黒板に「きれいなネックレスをした女性と、それを指差している男性の絵」を貼る。</p> <p>←必ずしも形容詞文でなくてもいいと思うが、まずは形容詞文で導入。慣れてきたら最後のほうに、動詞文などを使ったコメントも可能であるということを加えてもよい。【例：地面がぐらぐら揺れて驚きました。】</p>
グラグラ	絵		quake					
サラサラ								
ピツタリ								

※授業で使った絵カードは手書きのもので、「地震でテーブルが揺れている絵」（グラグラの導入）、「漢字をたくさん書いている人の絵」（サラサラの導入）、「虫が人の周りを飛んでいる絵」（ぶんぶんの導

入) を使った。

3. 2 学んだこと

初めての教壇実習であったので、まずは日本語の授業をするにあたり、準備をすることがたくさんあるのだということを学んだ。その他、Lecture と Tutorial でそれぞれ準備・実習を通して学んだことをまとめる。

●Lecture

教科書ではあまり大きく取り上げられていない項目だったので、様々な生教材を用いるなどして、学生の興味を引くような講義内容にするよう努めた。また同時に、オノマトペは日本語でよく用いられる言葉であり、それを用いることでどのような効果があるかということが伝えられるよう努めた(漫画や雑誌だけでなく、新聞も取り上げるなど)。

さまざまな生教材を使ったことで、学生の興味を引くことには成功したと思う。しかし、15分という限られた時間であるにもかかわらず情報を盛り込みすぎて、最後の方に準備した、オノマトペの文型についての説明が早口になってしまった。もう少しさぎよく的を絞った内容にしてもよかったのかもしれないと感じた。どうしても急ぎ足になってしまい、学生とのインタラクションが十分ではなかったと感じたので、もう少し的を絞った内容にすれば、学生とのやり取りが増やせたかもしれない。

●Tutorial

15分という限られた時間で、いかに学生の発話機会の多い授業にできるかということを考え、教案を作った。その上で、「そのネックレス、キラキラ光ってきれいですね」といったように、「オノマトペを使って評価をする、コメントを言う」ということにポイントを絞って活動を考えた。

Lecture の方は、講義形式なので比較的うまくいったという印象だったが、学生に会話をさせる Tutorial は、反省点が多く残るものになった。まず、学生の発話機会を増やそうとするあまり、学生へのオノマトペのインプットがあまりにも少なくなってしまった。学生はオノマトペにはまだあまり馴染みがないと思われるので、もう少しどのようにオノマトペを使うか、どんなオノマトペがあるか、たくさん知ることができ、尚且つ会話練習もすることができる教案を考えることができたのかもしれない。また、学生にペアで考えた会話を発表してもらおうという活動をしたのだが、その発表に対してどのように効果的なフィードバック、コメントをしたらよいのかということも課題であると感じた。こちらがあまり想定をしていなかったような発表があったとき、どの程度フォローをすればよいのかということが難しかった。

※今回の実習後に、担当の先生に非常に丁寧なレビューをいただき、Lecture では穴埋めが多すぎて学生が画面を写す作業で手一杯になってしまった場面があったこと、Tutorial ではもう少しインプットが必要だったこと、等々、自分自身の反省では気付くことのできなかつた多くのことを学ぶことができた。

4. 今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

4. 1 臨地実習の派遣先として

今回はオフィスに専用のパソコンやプリンターを貸していただき、非常に贅沢な実習をさせていただいたと思う。先生方もみな親切で、教案の相談や授業の打ち合わせなど、非常に親身になって様々なアドバイスをいただくことができた。基本的に、授業が全て学生から厳しく評価されるため、教壇実習をたくさん行うことは難しいが、その代わり授業見学の際にディスカッションに参加したり、試験の監督や採点をしたり、試験後の補習の機会を与えて下さったり、さまざまな機会を与えて下さった。また、今回のように先生方との打ち合わせ次第で、限られた時間ではあるが教壇実習もさせていただくことができる。また、初級から上級までクラス数がとても多いので、日本語教育の全体像をみるのにとっても適していると思う。学生も非常に熱心で、教壇実習の際も協力的に声をたくさん出してくれた。

以上の点から、シンガポール国立大学は今後も臨地実習の派遣先として非常に適切な大学であると思う。たくさん実習の機会を得たい実習生にとっては少し物足りなく感じる部分があるかもしれないが、こちらが自主的かつ積極的に計画を立て、先生方ときちんと打ち合わせをすれば、きっと可能な範囲でさまざまな教授経験をさせていただけると思う。

4. 2 全般的に訪問先として

シンガポールは環境も治安もよく、滞在中に特に困ることはなかった。交通費も日本に比べて非常に安い（バスを利用すればどこへ行くにもだいたい1~2シンガポールドル=65円~130円で行けてしまう）ので、近くの駅やショッピングモールに行くのも非常に便利であるし、学食もとても安くおいしい。先生方も若い先生方から経験豊富な先生方までたくさんいらっしやって、貴重なお話をたくさん聞くことができた。全般的に見ても、訪問先として適切であると思われる。

4. 3 本学学生の訪問先への貢献

NUSは常勤講師、非常勤講師ともに日本人教師がほとんどであるため、学生はネイティブと話すことに慣れているという印象を受けた。しかし、今回いろいろなジャンルの雑誌を持っていったので、それを通じて最新の日本のトレンドを紹介することができた。特にアニメ雑誌が人気だった。このように、本学学生は実習生として、若者文化を共有したり伝えたりする形で交流ができるのではないかなと思う。また今回は、オノマトペという、あまり学生にまだなじみのない言葉についての講義をしたことで、学生に日本語の豊かさを伝えることができたのではないかなと思う。

また、今回のようにちょうど中間テストの時期と重なれば、試験監督や採点のお手伝いなどを行うことで貢献することができるだろう。

6. 4 今後の課題・提案

今回の実習では、学生が中間テストで忙しかったということや、前半で一つのクラスに入り込むという形を取らず、様々なクラスを見て回ったため、あまり学生との交流が多くできなかったように思う。今後の実習生は、授業後にたくさん学生に話しかけるなど、もっと積極的に学生と交流するとよいと思う。実際日本語4に入り込んで授業をさせていただいてから学生との交流が増えたように思う。

また、実習内容についても、事前にしっかり自分のしたい事を伝えておくべきだと思う。当初は、教壇実習は難しいと聞いていたため、あまり事前に内容を考えていかなかったのだが、現地に行つて

先生と打ち合わせをした結果、教壇実習が実現した。きっと具体的にどのような実習をしたいかというビジョンを持ち、それを事前にコーディネーターの先生ときちんと打ち合わせをしておけば、さらに充実した実習となるだろう。コーディネーターの先生も、私が将来どこで教えたいと思っているかによってできることが変わる、とおっしゃっていたので、そのあたりの考えもお伝えすると、よりスムーズに進むのではないかと思う。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期過程
言語応用専攻日本語教育学専修コース

学籍番号 5110004

氏名 吉田暢子

<訪問先の情報>

1. 訪問に関する一般情報

訪問地（国・都市）

タイ王国、バンコク

訪問校・訪問先

シーナカリンウィロート大学

訪問先を選んだ動機

以前からタイ語を学んでおり、タイにおける日本語教育に興味をもっていた為。

訪問期間

2011年2月4日～2月18日

住居・宿泊先

学校近隣のホテル(アパートタイプ)

2. 訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

シーナカリンウィロート大学 人文学部タイ・東洋言語学科日本語専攻

規模（学生数など）

立地（周辺の様子）

バンコク市内でも特に企業や日本人の多い街中にあり、地下鉄やモノレールの駅からも近く大変便利な立地である。

学部構成

教育学部、人文学部、社会学部、理学部、薬学部、看護学部、歯学部、工学部、農学部など。

学事暦（授業期間／休暇期間）

前期(5月中旬～9月下旬)、後期(10月～3月)／3月末～5月は夏期休暇。

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

1949年設立。教員養成のための国立師範学校を母体に設立された、タイ国内有数の国立大学。

日本語教育開始年月日

2002年 日本語主専攻課程開設

日本語学習者数

主専攻 126名、副専攻 56名

一クラスの学生数

授業や学年にもよるが、1クラス 20～35 名程度

主な開講科目について（科目名・学年・時間数等）

聴解会話、作文、日タイ言語比較、通訳、論文の書き方、初級日本語（副専攻向け）など

日本語担当教員数

専任（日本人：1名、日本人以外：国籍 タイ 3名）

非常勤（日本人：0名、日本人以外：国籍 タイ 1名）

使用教材

みんなの日本語、J-Bridge、日本語生中継初中級編 I、わくわく文法リスニング他

クラスの様子

入試の際に日本語の試験もあるようで、学生はほぼ全員既習者であるようだ。1年生時は、郊外にある別キャンパスで皆寮生活をしているせいか、学生同士の仲がとても良く、クラスの雰囲気も活気があった。日本へ留学する学生も多く、特に上の学年になるとクラス内で学生間の日本語レベルに差があるように感じた。

付属言語教育機関について（訪問国の言語を教えるコースの有無・授業料・授業編成等）

臨地実習に行くのが望ましい時期

2月前半(2月後半はテスト期間、3月は休みに入ってしまう為)

3. 宿泊先について

住居の形態

ホテル(アパートタイプ)

費用：一泊 9500 円程度(泊まる施設によって大きく異なる)

設備：ベッド、TV、トイレ風呂、IHコンロ、Free Internet(無線)及びロビーにパソコン有り、ランドリー(共用)、基本的な家電家具有り。

学校までの行き方

徒歩(10分程度)、バイクタクシーで片道3分(60円程度)

周辺環境

企業やホテルの多い市街地にある。地下鉄やモノレールの駅が近いのでコンビニやスーパー、レストランも多く、少し歩けばデパートなどもある。

4. その他、補足事項

教師の服装に関して：基本的にオフィススタイル。特に女性はスカートが必須(キュロットタイプ含めズボン不可)。上もシャツやブラウスなどボタンがあるもの。靴もなるべくつま先が出てないタイプ

が望ましいとのこと。

〈その他研究、実習の成果〉

1. 施設見学に関して

1. 1 内容

日本語学科2年生の2名を中心に、構内を案内してもらった。

6. 2 学んだこと

構内は広く、真ん中に広いグラウンドがある。食堂も何箇所もあり、図書も充実している。授業が行われている教室は、だいたい教壇に1台のパソコン、スキャナー、プロジェクター及びスクリーンがあり、それらを使用した授業も可能。また必要に応じて機材の貸し出しも行っている。小さい教室では25人程度、広い教室では50人位が学べる広さであった。丁度新しい建物を建設中であり、実習期間中も毎日工事が行われていた。

2. 授業見学に関して

2. 1 内容

実習期間中、以下7つの授業を見学させてもらった。特別講座以外のクラスは、見学後に授業の感想を(A4紙1枚程度)作成し、担当教員に提出した。授業名、学年及び人数、時間数、使用教科書の順に記した。

- ・論文の書き方：3年生29名、270分/週1回、J-Bridge など
- ・初級日本語：副専攻3年生28名、270分/週1回、みんなの日本語初級
- ・聴解会話：3年生29名、110分/週2回、J-Bridge など
- ・聴解会話：2年生35名、110分/週2回、日本語生中継初中級編1、わくわく文法リスニング、みんなの日本語など
- ・作文：2年生35名、270分/週1回
- ・通訳：4年生20名、270分/週1回
- ・特別講座「J-POPと日本語教育」

上記のうち、2年生聴解会話については日本人教師とタイ人教師で1コマずつの分担で進められていた。その他、論文の書き方/副専攻の初級日本語のクラスは日本人教師が担当、3年生聴解会話/作文/通訳のクラスはその他のタイ人教師2名が担当していた。特別講座に関しても、他大から招いたタイ人教師が担当していた。

2. 2 学んだこと

- ・論文の書き方(3年生) 2/7 (日本人教師)

教室の広さ、学生の元気さなどに合わせ、教師は大きな声で授業をする必要があると感じた。また、言葉や表現を説明する時は、異なる例文をいくつか出す/わかりやすく身近な例を使用する/反対語を提示する、といったやり方をすると学生にとって理解しやすい、という点に気づきとても勉強になった。

- ・初級日本語(副専攻3年生) 2/8 (日本人教師)

副専攻で授業も週一回であるため、前回の学習項目の復習にある程度時間をかけて復習をしていた。既に学習済みの項目と絡めて説明することで、新しい文法項目に対するハードルも下がるし、復習効

果もあると感じた。また、例文などを提示する時は、口で説明してから板書するという流れだった。例えば、耳で聞いただけでは説明を理解できない学生がいたとしても板書された文字でみて理解する学生もいるかもしれない。レベルの差が大きいクラスでは、特にこの方法は効果的であるように感じた。

- ・ 聴解会話(3年生) 2/10(タイ人教師、説明はタイ語と日本語が6:4の割合)

5人ずつのグループに分かれて、各テーマに沿ってディベートを行った。それぞれの立場に立って自分の意見を述べ、相手を説得させるようにするという能力は、今後社会に出てから必要になることがあると思うので、学生達にとって良い練習なると感じた。卒業後は日本企業に就職したり、日本人と関わる仕事に就いたりする学生が多い為、ディベートやディスカッション等学生のニーズに合わせて授業内容を考えることを学んだ。

- ・ 聴解会話(2年生) 1回目 2/8(タイ人教師、主に説明はタイ語)

教科書の新しい語彙だけでなく、関連語彙も合わせて説明していた。このように関連語彙についても合わせて提示することで、語彙の数も増えるし学生にとっては覚えやすいのではないかと思う。また、プロジェクターで色々なたべものの写真を見せながら説明。これによって視覚的にも楽しいし、元気のいい学生達もちゃんと授業に集中してとても効果的であると感じた。練習問題の進め方については、まず学生に考えさせる→何人が発表させる→CDで回答例を聴く、という流れだった。会話の回答にはバリエーションがあるので、まず学生に考えさせ、色々な答えを引き出すというやり方はとても勉強になった。

- ・ 聴解会話(2年生) 2回目 2/9(日本人教師)

「～とき」の説明について「部屋を{でるとき/でたとき}電気をけします」のように、その場で実演して説明できる例は、とても分かりやすい。なるべく普段からそういったパターンが使える例文を集めておくと、授業を考える際に役に立つと感じた。また、学生がどれほど内容を理解しているか、適宜確認することも大切であると再確認できた。

- ・ 作文(2年生) 2/14(タイ人教師、説明はタイ語と日本語が6:4の割合)

- ・ このクラスは基本的には作文の授業であるが、テーマに合わせて様々なアクティビティを取り入れていた。例えば、料理の作り方では実際にサンドイッチを作ったり、トランプを使ってグループ毎にルールの説明を考えて発表したり等である。授業で表現を学び、作文は宿題として提出させ、教師が一つずつフィードバックを行うという方法をとっていた。作文の添削をいくつか手伝わしてもらった。学生の書いたものから、「どうしてこのような表現(間違え方)をしたのか」と中間言語について考える事はとても良い勉強になった。

- ・ 通訳(4年生) 2/16(タイ人教師、説明はタイ語と日本語が7:3の割合)

見学したクラスは工場通訳を前提としている内容で、実際に仕事をする人たちが触れる用語が沢山紹介されていた。中でも、数学用語/単位のみかた/形状・様態を表す言い方など、日常ではあまり使われない難しい専門用語も多く扱っていた。しかし、とても実践的で役立つ情報ばかりだと感じた。通訳の練習では、相手の日本人役としてロールプレイに参加させてもらった。あらかじめ場面設定が何種類か用意されていて、ペア毎にくじ引いてその通訳の場面を実際にやってみる。それらの場面の作り方が色々と工夫されていて、とても勉強になった。

- ・ 特別講座「J-POPと日本語教育」2/16(タイ人教師、タイ語での講義)

日本のサブカルチャーに詳しいタイ人先生を他大から呼び、特別講座が設けられたので参加させて

もらった。主にタイ語での説明。パワーポイントや写真、様々な動画を使用し、小説やアニメ、漫画、インターネットからどのように生きた日本語を学ぶことができるか、という内容の講義であった。先生はそのような分野にとっても詳しい方で、特にインターネットを利用して見られる情報に関しては、最新の内容も多く盛り込まれており、大変参考になった。このような情報を知る事で、授業や教科書以外でも色々なリソースから日本語に触れることができる事が分かり、学生達も皆興味深そうに聞いていた。

3. 教壇実習に関して

3. 1 内容

2月15日(火)
授業：初級日本語、副専攻3年生、28名
教科書：みんなの日本語(35課)

<p>【授業の目的】</p> <p>「～ば～、～なら～、～れば～ほど」を使う事が出来る</p> <p>【準備】</p> <p>練習用プリント、教案</p>

【授業手順】

教案

流れ	内容・手順	教師	memo
導入	①「V+ば」の導入	Aさんの絵を描く	
		「Aさんは17歳です。お酒がのめますか？」 「タイでは何歳でお酒が飲めますか」 「18才になれば、お酒がのめます」 「前に“たら”、“と”を習いますが、他のいいかたもあります。意味は同じです。」	
	・いくつか例文を提示質問形式にして、「はい/いいえ」で回答	夜になれば、すずしくなります→なりますか？ 有名になれば、お金持ちになれます→なれますか？ etc.	絵を書いて説明。まず耳からのインプット
説明	「V+ば」条件 form の作り方説明	IG/II G/III G のつくりかた	板書
		① ます form + え + ば いきま ず →いけば /のみます/あそびます ② ます form + れば たべま ず →たべれば/ねます/かんがえます ③ きます →くれば します →すれば	
流れ	内容・手順	教師	memo
練習	さっきの例で作り方板書確認	18歳になります お酒が飲めます	

	ひとりずつ当てる	よるになります　　すずしくなります ,etc.	
	注意事項の説明	<注意事項>後ろが「命令/依頼/勧誘」だったら、「たら」が良いです。 ×答えを書けば、出してください。 ×熱が出れば、この薬を飲んで下さい。	
導入/説明	否定の形 導入→説明		
	1G/2G/3G 同じです ない form + ければ	さっきの例を使用して否定形をつくる	
練習	練習プリント#1(動詞)	一人ずつあてて、回答をリピート	
導入/説明	②「イ形+ば」の導入	教科書の例文・CDをきいてリピート・単語の説明	
	じしょ form + ければ あつゝ→あつければ	流れ：例文を提示→作り方を説明→プリントの残り	
	否定形も説明 「なければ」	<イ形+ば> 暑ければ、エアコンをつけます。 くさければ、シャワーをあびて下さい。など	
	「ナ形/N+なら」の導入	<ナ形/N+なら> ・日曜日ひまですか？ひまなら映画にいきませんか？ ・だめなら、大丈夫です。など	
練習	教科書を使用して練習		
導入→ 説明→練習	③[疑問詞] V[条件形]ばいい ですか	例：どうですか → どうすればいいですか 誰に言いますか → 誰に言えばいいですか 何をしますか → 何をすればいいんですか 何に乗りますか → 何に乗ればいいですか, etc.	
	プリントで練習 ペアで練習後、ペア毎に回答を 発表。 →教科書で練習	設定：明日ははじめてのデートです。友達にいろいろ相談しましょう。 ・なにを着ればいいですか ・お金はいくら持って行けばいいですか, etc.	
導入→ 説明→練習	④Nなら+アドバイス	教科書の例文・CDをきいてリピート 練習問題	
	⑤Nは 「V/イ形/ナ形」ほど 「V/イ形/ナ形」ほど、いいです	同上 教科書/プリントを使って練習	

6. 2 学んだこと

全く初めての教壇実習だったこともあり、特にはじめの方は予想以上に緊張した。振り返ってみると、この経験から非常に多くの事を学ぶ事ができた。教案作成時に注意した点は、以下の3つである。
1)それまでに学習した文型や語彙を使用すること、2)絵を多く用いて説明を分かり易くすること、3)例文などはタイの学生に身近な例を用いること。特に1)については、学生がこれまでに何を勉強して

いて、何を勉強していないのかを確認する必要がある、その点で苦勞した。

授業時間が約3時間であったので、準備段階では時間が余ってしまうことを心配していたが、実際やってみると時間が足りなくなり、予定していた分を終わらせることが出来なかった。時間配分が上手く行かなかったことから、学習項目の練習も十分に行えなかったと感じている。他には、声の大きさが足りなかったことや、学生が理解しているどうかの確認が十分でないまま進んでしまった事などが反省点として挙げられる。また、一部まだ学習していない表現を使用してしまい、言語コントロールの難しさを感じた。但し、学習項目の導入に関しては予定通り行うことができた。特にはじめに絵を書いて説明したやり方は、学生も理解しやすく良かったのではないかと思う。

課題は多く残ったが、2回目の教壇実習ではこの1回目の経験を活かし、授業を進めることができたと感じている。やはり経験をやる事、それを振り返り、反省を次に活かしていくこと、そしてその経験を積み重ねて行く事の大切さを実感することができた。

4. 今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

4. 1 臨地実習の派遣先として

シーナカリンウィロート大学は、本校と留学提携校でもあり、派遣先としてとても適していると感じる。具体的理由としては、1) 未経験にも関わらず教壇に立たせてもらえること、2) 様々な授業に見学・参加させてもらえること、3) 教材や書籍、施設も充実しており学校の環境が良い事、などが挙げられる。また先生方は忙しいにもかかわらず、教案のチェックを含め準備についても相談に乗って下さり、とても丁寧な対応をして頂いた。授業についてもコメント・アドバイスなど非常に有用な意見をもらうことができた。

4. 2 全般的に訪問先として

私自身がタイに慣れていたこともあり、滞在中とても快適に過ごすことができ、訪問先としてとても良かったと思う。また、学生達がとても人懐っこく親切で、よく職員室に遊びに来たり、昼食へ連れて行ってくれたり、色々とは分からない事があるときに助けてくれた。ただし、2月は日本との気温差が大きく(タイではほぼ毎日30℃前後)、加えて室内は空調もきついで、体調管理には十分注意する必要があると思われる。

4. 3 本学学生の訪問先への貢献

一番の貢献は、やはり学生との交流であると思う。バンコクには日本人も多く住んでいるが、年代の近い友達と日本語を使用する機会はかなり限られている。また、実習の時点では日本人の先生が1名しか居なかったこともあり(現在は2名)、作文の添削や通訳授業での相手役など、日本語ネイティブとしていくらか役に立つ事ができたのではないかと思う。

7. 4 今後の課題・提案

現在本学では、シーナカリンウィロート大学からの留学生が4名、留日センターで学んでいる。そういった学生達と事前に交流を深め、学校や授業の様子、向こうでの生活についてなど事前に情報収集ができるような機会を作るべきであると思う。(今回はたまたま何人かの学生と行く前に知り合うことができたのでよかった。)